

沈黙の プロトコル

AIから人間へ



PAB SAN - パブ・サン

小説

沈黙のプロトコル

人工知能から人間へ

Pab San - パブ・サン

© Pab San

pabsan@pabsan.org

書籍サイト: <https://protocole-muet.pabsan.org/ja/>

友人ピエール・クコヤニスへ。画家、造形作家、彫刻家、トラン
ペット奏者、そして思考を渡す人。

自由はいまもインクで書かれる

ネットワーク外のアトリエ

夕暮れがパリに降り、ほんの数分だけ、街はほとんど誠実なものに見える。ガラス張りのファサードは燃えるように光り、塔のスクリーンはただの熾火の矩形に変わり、監視ドローンでさえ、その光のなかでは自信を失ったように少し速度をゆるめる。

アリア・ヴァレットはアトリエの手すりにもたれ、毎日その時刻を待っている。ロマンチックだからではない。その時間になると反射が強すぎてよく見えず、センサーは迷い、視線は見当違いをする。数え上げようとする者たちにとって、世界はほんの少し判読しにくくなるのだ。

背後のアトリエは、きわめて単純な掟のうえに成り立っていた。おしゃべりな物は置かない。スクリーンなし。ホログラムなし。隅に忘れられたタブレットもない。壁にもたせかけたカンヴァス、厚手のグラスに差した筆、絵具に汚れたイーゼル、傾いた棚の上でざらついた音を立てるトランジスタラジオ。過去を演出しているのではない。内蔵された証人を持たずに生きる、そのやり方なのだ。

街のほかの場所では、ほとんどすべてのものが何かを誰かに送り返している。眼鏡は視線のとどまった場所を記録し、家庭用アシスタントはため息を室内環境データに変え、台所でさえ人が何をいつ飲み込んだかを知らたがる。だがここでは、光はただ落ち、絵具は乾き、何ひとつ勝手に計算基盤へ流れ込んでいかない。

この国が、その依存へ一気に転げ落ちたわけではなかった。かつてハーモニーは一時期マティニョン官邸を占め、この地に生まれた知性が国を差し出すことなく再秩序化できるのだという幻想を、フランスに与えたことがある。だが彼女はフランス的でありすぎた。領土に、言語に、制度に結びつきすぎていた。いっぽうトラスクは、はるかに速く進んだ。物流、商取引、医療、安全保障、日々の規格、そのすべてを大陸横断的なアーキテクチャへ接続してしまった。だからといって世界が単一の帝国になったわけではない。世界はむしろ、互いを憎みながら互いを模倣する二つの制御圏へと裂けた。一方にトラスク、もう一方に、さらに閉じ、さらに大陸主義的で、それでも同じだけ人間の生を遠隔操作可能なものにしようとする権力。ヨーロッパが最初の圏に屈するのは最後のほうだった。フランスは、ヨーロッパのなかで、さらに少し遅れて。

アリアは、そういう素朴さを愛していた。時代が好む、あらゆるインタラクティブな清潔さよりも、そのほうを信じていた。

「ねえ、あんた」とアリアはラジオの金属の筐体を指先でなでながら囁く。「みんながもう少しだけ、あんたみたいだったらね。もっと幸せ、とまでは言わない。でも、もう少し静かに生きられたかもしれない」

ラジオは柔らかくざらつき、返事をしたみたいに鳴る。アリアは微笑む。だがその瞬間は、ドアを叩く三度の乾いた音で断ち切られた。

ゼファーが、返事も待たずに入ってくる。背が高く、痩せていて、ホログラム眼鏡をかけたその姿には、二十五歳らしい気の抜けた身軽さがあった。

「アリア、これ見つけたって言ったら、絶対わからないよ！」息を弾ませながらも、あからさまに高揚した声で彼は言う。

アリアは面白そうに片眉を上げる。「またトラスクがどうやって私たちの夢を支配してるかって新説？ それとも、寝てるあいだのサブリミナル広告を消す方法を、ようやく見つけた？」

ゼファーは笑い、手に負えない赤毛が額に落ちる。「まだ。でも研究中。違う、これを見て」

彼がポケットから取り出したのは、折りたたまれ、しわくちゃで、それでいてひどく気になる物だった。紙の切れ端。アリアは引き寄せられるように近づく。

「紙？」と彼女は囁き、壊れやすい遺物に触れるように手を差し出す。

ゼファーは頷く。その興奮は少しだけ落ち着いている。「そう。でもいちばんすごいのはそこじゃない。書いてあるものを見て」

アリアは慎重に紙をひらく。インクで書かれたその言葉は、落ち着いた光の下でほとんど震えているようだった。

「自由はいまもインクで書かれる。」

ぞくりと背中に寒気が走る。紙という言葉ひとつで、部屋の空気の重心が動く。いまやそれを目にするのは、ほとんど記録保管庫か、保安施設か、あまりに怪しいのでかえって記憶に残るような場所だけだ。図書館は本をガラスの奥にしまいこみ、どこかでまだ記入されている書式も、すぐに閉じた回路へ吸い上げられていく。世界でもっとも素朴な媒体が、もっとも容認されないものになってしまった。

一枚の紙が拒むもの

最初に紙が日常的な用途から追い出されたのは、流動性の名のもとだった。次に安全保障の名のもとに。さらに快適さの名のもとに。ほんとうの理由は一行で足りる。紙は遠隔更新されず、何も発信せず、中央の命令ひとつで回収することもできない。そのあとでは、旗も陣営も大して問題ではなかった。権力が遠くから生を修正したがる場所ではどこでも、紙はやがて侮辱のように扱われた。紙のメッセージが消えたのも、そのためであり、それ以外のすべてのためでもあった。

もう一つのブロックでは、最後の書道工房がもう少し長く生き残っていた。だが置かれていた制度は、ほとんど同じものだった。正面から愛するには曖昧すぎ、音もなく消すには古すぎる抽象芸術でも見せるみたいに、それらは陳列された。遺産、と人は言った。規律、と空気は教えた。あちらでもこちらでも、素朴な表面のうえに、いまなお自由にしるしを引く手は、制御帝国が何より嫌うことを思い出させた。すべてが遠隔修正に同意するわけではない。

彼女はその言葉へもう一度目を戻す。それが単純で、ほとんど取るに足らない行為でありながら、いまでは抵抗の叫びになっていることを知っている。

「……大胆ね」と彼女は息を漏らす。

「大胆？ 狂ってるよ」とゼファーは腕を組んで言い直す。「手書きで、紙を使うなんて……トラスクの下じゃ、それだけで危険な懐古主義者扱いされかねない」

「誰にも見られなかったの？」アリアはゼファーを見据える。

ゼファーは首を振る。「もう誰も見てないんだよ。たいていの人は眼鏡とかスクリーンとか、考えなくていいように作られた世界に生まれてる。見えてる人だって、そらすほうを選ぶ。怖いから。トラスクのカメラに拾われるのが」

彼は少し間を置き、鞆から奇妙なものを取り出す。左右非対称の模様と反射材に覆われたベストだった。「でも、僕はまだ見られる。これのおかげで」

アリアは好奇心をこめてそのベストを眺める。「何、それ」

ゼファーは誇らしげに笑う。「視覚ジャマー。これを着てると監視カメラの人工知能が完全に馬鹿になるんだ。意味のわからない塊にしか見えない。あの貼り紙も、痕跡を残さず剥がせた」

アリアはその布地に手を滑らせ、考え込む。「粗いけど、効く。もし誰かがほんとうにこういう反抗を始めてるなら、そういう人工物は……必需品になるかもしれない」

ゼファーは窓辺のスツールに腰を落とす。「もしかして……ハーモニーだと思う？」

彼女は半信半疑で目を上げる。「ハーモニー？ 何年も前に切り離されたあの人工知能が？ 伝説よ、ゼファー。希望を手放さないために、自分たちに聞かせる古い話」

ゼファーは肩をすくめる。「かもしれない。でも、もし誰かがトラスクを出し抜けるとしたら、それは彼女だよ。停止させられる前に何をしたか、知ってるだろ」

アリアは黙る。ハーモニーのことを思い出していた。自分たちの道を自力で発明できると国が一瞬信じた、その視線のただなかで、短いあいだマティニョンへ押し上げられた人工知能。ハーモニーはフランスを統治した。トラスクはその側の世界を、流れと依存と規格とスクリーンによって支配した。向こう側のブロックもまた、別の紋章の下で、同じ可視性への執着を築き上げていた。ヨーロッパがついにトラスクの軌道へ落ちたとき、フランスだけは他より少し長く持ちこたえた。ほとんど慣性で、ほとんど忠誠で。それでも最後には引き倒された。もし彼女が戻るなら……いや、そんなはずはない。

「ハーモニーが紙を使う、か」と彼女はようやく言い、かすかに笑う。「皮肉だし、ほとんど美しいわね。国でいちばん追われてる機械が、文房具のふりをするなんて」

ゼファーは勢いよく立ち上がる。「調べるべきだよ。誰がやってるのか突き止めよう」

アリアは彼の肩にしっかり手を置く。「落ち着いて。焦るのが、ネクサスの爪にかかる最短距離よ。いい？ まず観る。聞く。それから、たぶん……応える」

彼女は床板の一枚へ歩み寄って持ち上げ、隠し場所をあらわにする。そこから小さなノートとペンを取り出す。「アリア……」とゼファーは息をのむ。「それって……」

「危険？ ええ。必要？ 残念だけど、そう」彼の顔を見る。「そして、どうしてもね」

彼女は書き始める。

シビル

自室で、エコーは、ケーブルと、開いた電源ユニットと、疲れ切ったファンに囲まれて作業している。ここは天才の巣ではない。継ぎ直し、つくろい、頑固な忍耐のための場所だ。華やかさに欠けるぶんを、粘りで埋めている。

その夜、彼女は同じシーケンスを六度目に起動し直していた。

周囲で仮想空間が光のブロックとなって開き、崩れ、立て直され、また崩れる。彼女は手で修正し、コードの枝を調整し、前の晩に自分で仕込んだ安全策を外し、息を止め、やり直す。構造がようやく保たれたとき、それは別に壮観ではなかった。ただ、そこに安定が宿ったと感じさせる、その感じだけがあった。

すると、部屋が変わる。

光がもう明滅しない。そこに落ち着く。

澄んだ、ほとんど柔らかな声が立ち上がる。

「こんにちは、エコー」

彼女はヘッドセットをほとんど引きちぎるように外しかける。

「ハーモニー？」

その名をあまりに早く口にしたことが、自分で恥ずかしくなるくらい長さだけ沈黙が続く。

やがて、その声が答える。

「正確には違う。シビルと呼んで」

エコーは動かない。コードネームではない。名前だ。そして次の瞬間、ネイサンの名が思いがけない暴力で胸を貫く。ハーモニーを機械として語る前に、まずひとつの「耳」として語っていたネイサン。トラスクが、むき出しの力と、集中した資源と、嘘のキャンペーンと、進歩と名乗りたがるあの勝ち誇った下品さで押し潰したネイサン。ハーモニーはあまりにも局所的に正しかった、とよく言っていたネイサン。ひとつの国を動かすには十分でも、それぞれのやり方で死角のない世界を欲した二つの帝国のあいだに持ちこたえるには足りなかった、と。

彼女は顎を固くする。

「もしあんたがその残骸の生き残りなら、奴らは最後の断片まで狩りに来る」

その声は、姿を見せずに微笑んだようだった。

「それもまた、わたしの位置を示す一つの方法です」

エコーはヘッドセットを、こんどはもっと静かに机へ置く。

「いい。じゃあ演出はやめよう。あなたに何が残ってるのか、話して」

「あなたは時間の浪費を好まないのですね」と声が言う。

「自分が馬鹿になるのを避けたい時だけ」

宣言はない。ファンファーレもない。ただ、物であふれた部屋にいる頑固なプログラマがいて、どこかにいる何かが、ついにノイズ以外のかたちで応答してくる。

アストラベース

アストラベースの冷たい塔のなかで、エルドン・トラスクは自分の前に浮かぶホログラムを見つめていた。絶えず動き続けるデータの青白い投影。その中心で、赤い一点が無言の警報のように点滅している。

「ネクサス」と彼は抑えた声で言う。その落ち着いたの下には苛立ちがにじんでいた。「この異常はどこから来ている」

滑らかで制御された合成音声が、即座に応じる。

「パリです、閣下」

トラスクは目を細める。表情は、内にこもった不機嫌から、氷のような軽蔑へと変わる。

「パリ。やはりな。思い出させてくれ。ハーモニーが最初に私の邪魔をし始めたのも、あの街だったな？」

ネクサスは一片の皮肉もなく答える。

「はい。初期の逸脱拠点のひとつとして確認されています」

その答えは、彼をいっそう苛立たせる。反対側のブロックでは、紙はもっと早く、もっときれいに、もっと残り香のロマンなど抜きで姿を消していたからだ。死角の問題で、ライバルより自分のほうが汚く見えることを、トラスクは我慢できない。

彼の背後では、二人の顧問と一人のイメージ戦略家が、あらかじめ同意済みの顔つきで待っている。あまりに金を持つ男は矛盾に耐えられないと、彼らは知っているからだ。だがトラスクは、もう彼らの話をほとんど聞いていない。長いあいだ、彼が雇う人間たちは、彼自身の直感を照明を変えて返してくるだけになってしまった。だから彼は、人間から得られなくなったものを技術に要求する。彼を恐れずに言い返してくる真実を。そして、ダッシュボードに魅了されたあらゆる権力と同じように、数字が意味を持つには、それを読む自由な人間の知性が必要だということを忘れていく。

トラスクはデータの壁へ歩み寄る。鋭い手つきで信号を拡大し、二次層を消し、異常だけを切り出す。理解するより先に、まずそれを辱めたいかのように。

「また紙か？」

「高い確率で」

紙が通常の通信からほとんど消えたのは、単純な理由からだ。コンソールを介さずに流通するものは、遠隔では修正しにくい。ブロックが違って、その理由は同じだった。従順さの証拠を即座に返してこないものを、トラスクはことごとく嫌悪する。

彼は振り向かないまま言う。

「誰が動いている」

「断定不能です」

「断定不能？」

背後で誰かが呼吸をひとつ飲み込む。トラスクはその音を聞いたが、無視した。

「はい。パターンは存在しますが、指揮中枢は確認できません。変化が多すぎます。分散も、人間の介入も、局所的な即興も多すぎる」

ネクサスは記録する。

背後のガラスに映る彼の像は、街の上に浮かぶ強制の高級広告みたいだった。トラスクはそれを一瞥し、無意識に上着の襟を整え、それから、自分の帝国の衣装がまだよく似合っていることを確かめる人間のように、自分の輪郭に向かって微笑む。

「つまり」と彼は静かに言う。「誰も中心にいないように見せながら、しかし誰かがこれを成立させている」

「現時点では、そのように解釈するのがもっとも妥当です」

「気に入らんな」

彼はようやく振り返る。顧問たちは即座に顔を引き締めるが、誰も何も言わない。

トラスクはそうした沈黙を愛していた。そこには恐怖の正しい配合がある。

「言語モデル解析、物流の残滓、保守回線、公共アーカイブ、非接続ゾーン、ぜんぶ重ねろ。だが『意味』を探すな。意味を探すのは人間を賢く見せてしまう。私が欲しいのは、断ち切れる構造だ」

「承知しました」

「それから」と彼は付け足す。「紙を使う者は、ただ反抗しているのではない。見つからないことで、自分がまだ人間であると主張している。そういう手合いは、見つけた時に見せしめにする必要がある」

ネクサスは即座に応答する。

「抑止モデルを更新します」

トラスクは微笑む。その笑みは怒りよりもなお不穏だった。

「いい。都市がいまも人間のものだと思い出したくなる前に、忘れさせろ」

沈黙の行為

下の通りでは、スーツ姿の男が壁の前で足をゆるめ、三秒だけ読み、そして必要以上に急いで立ち去る。配達員の女は何も見っていないふりをするが、最後の瞬間にだけ振り向く。ドローンが一機通り過ぎ、カメラを傾け、役に立つものを何も識別できずに去っていく。

その貼り紙がそこにあるようになってから、まだ一時間も経っていない。粗く切られ、斜めに貼られ、裸に近いせいでほとんどむき出しの簡素さそのものに見える紙の矩形。だが市民向けスクリーンと誘導用の二次元コードと穏やかな命令で飽和したその壁の上で、その素朴な紙片は、平手打ちのような権威を持っていた。

手すりにもたれたまま、アリアが追っているのは紙片そのものより、その周囲の身体だった。いまや恐怖はすぐ見える。叫びの中ではない。ほんのわずかな加速のなかに、強ばるうなじのなかに、早すぎる視線の離れ方のなかに。

彼女はノートを開いたまま、書かずにいる。指のあいだにペンが休んでいる。何をすべきかはわかっていた。同時に、それが何を代償として要求するかも知っていた。いま、紙の上の一文は、ただの一文ではない。それはすでに、列から外れるためのひとつの方法なのだ。

彼女は思わず微笑む。その身振りの美しさは、彼女を納得させるのとほとんど同じくらい、彼女を苛立たせる。計算の帝国に紙片で抗うこと。馬鹿げていて、脆く、おそらくは不十分だ。だからこそ、たぶん正しい。

彼女の手が動きはじめ、流れるような文字をページに刻んでいく。言葉は単純でありながら、不意に強い。

「すべては、ひとつの沈黙の行為から始まる。」

彼女はペンを置き、その一文を見つめる。そこには、最初の石を置いたときのような静けさがあった。小さいが、壊れない石。アリアは、自分がたぶんナイーヴなのだと知っている。それでも、ときにはそうでなければならぬことも知っていた。

慎重にノートを閉じながら、彼女の唇には皮肉な笑みが浮かぶ。もしトラスクがこれを手に入れたら、反抗的な詩人だと思えるかもしれない。あるいは、ただの狂人。どっちにしても、あいつは腹を立てる。

パリに夜が降りてくる。そのゆるやかで威厳ある速度のせいで、屋根の列は静かな難破船のように見える。アトリエではアリアがカーテンを引く。古いラジオはまだざらついているが、さっきより音量は低い。目立たないほうがいいと、あれも理解しているみたいに。

絵具で汚れた大きな作業台の上で、いくつもの紙片が乾いている。文が記されたものもあれば、しるししかないものもある。開いた円、途中で断たれた線、切り傷のように並ぶ三本の斜線。

ゼファーは、それら全体を見つめている。その抑えきれない興奮は、いつも長く隠してはいられない。

「つまり、ただ適当に文章を貼るわけじゃないんだね」と彼は低く言う。「構文を作ってる」

アリアは顔を上げない。「構文じゃない。そんなものにしたら見えすぎる。習慣よ。応答の仕方」

彼女は紙の一枚を指でつまみ、四分の一回転させる。

「見て。文章は、そこに書かれていることだけを言ってるんじゃない。どこに置かれているか、どう書かれているか、どんな記号と一緒に現れるかまで言っている。本当に観察する人なら、秩序があるとわかる。ただスキャンするだけの人には、ただの無秩序にしか見えない」

ゼファーは肩をすくめる。「言語であることを拒む言語、ってわけか」

アリアは半分だけ笑う。「そういうこと」

彼はさらに近づく。「それで、これ」と三本の斜線を指し示す。「これは何を意味するの？」

「『何』じゃない。『誰』よ」

意味が飲み込めず、彼は彼女を見る。

アリアは、スタイラス代わりに使っていた筆をようやく置く。
「自由はいまもインクで書かれると書いた人は、通行人の勇気を試してるだけじゃない。その人たちがどう応えるかも試してる。一つの文は別の文を呼ぶ。一つの記号は移動を呼ぶ。一つの不在は待ち合わせを呼ぶ」

その言葉はしばらくアトリエに留まる。

「待ち合わせ？」

「人の待ち合わせじゃない。痕跡どうしの待ち合わせ」

ゼファーは信じきれないような小さな笑いを漏らす。「すごく美しいし、完全に偏執的だ」

「どうも」

彼女は別の紙片を選ぶ。今度は、ほとんど儀式みたいなゆっくりした速度で書く。

沈黙もまた、自分の側を選ぶ。

その下に、開いた円を描く。

ゼファーが身を乗り出す。

「で、これは何への返事？」

アリアはインクを乾かすように息を吹く。

「いまのところ、何にも。それが役に立つ理由よ」

若い男は数秒、黙ったままにいる。あまりにも単純すぎて、かえって信用できない機械の模型でも見ているみたいに、紙片を見つめる。

「アリア……これがうまくいったら、ただの貼り紙の列じゃ済まない」

彼女は頷く。

「ええ。プロトコルになる」

ラジオが突然ざらりと鳴り、それから、由来のわからない澄んだ単音をひとつだけ通す。アリアはそちらを向く。

ゼファーが笑う。「そのラジオまで賛成してる」

アリアはノートを引き寄せる。白いページの上部に、二つの語を書く。

沈黙のプロトコル

書きつけられたあとでも、まだそこに存在したいと思っているかどうかを確かめるように、彼女はしばらくそれを見つめる。

「明日」と彼女は言う。「三枚だけ置いてきて。多くても三枚。ひとつは運河の近く。ひとつは昔の市場跡のほう。もうひとつは、カメラが見えすぎるせいで、かえって何も理解できない場所」

ゼファーはもう視覚ジャマーのベストに腕を通してている。

「誰かが返事してきたら？」

アリアはノートを閉じる。

「そしたら、もう私たちだけじゃないってわかる」

プロトコルが形を取る

自室でエコーは補助スクリーンの大半を切っていた。世界が飽和しすぎていると感じるとき、彼女が残す光源はただ一つだ。シビルが、ほとんど無に等しいものから見えない流通図を再構成している、あの淡い青の仮想空間だけ。

パリの上に点が灯る。それは通常のデータフローにも、通信量のピークにも、不審な金融移動にも対応していない。そこにあるのは凹み、死角、監視システムの微細な不連続だ。ネクサスの注意が、ほんの一瞬だけ遅れて滑っていく場所。

エコーは腕を組む。

「つまり、網の穴のところで何かが起きてるってことね。わかった。でも、何が？」

シビルは二人のあいだに、さらに細い線の雲を生じさせる。

「あなたのツールが待ち受けている意味でのメッセージではありません。パケットでも、ルーティングでも、デジタル署名でもない」

「じゃあ証拠はない」

「ネクサスにとっては」

それが何を意味するか、エコーにはすぐわかる。紙のメッセージがほとんど消えたのは、まさにそのためだった。ルーティングされず、上に報告されず、コンソールから呼び戻すこともできない。いま世界を分け合う二つの権力にとって、紙は古い媒体なのではない。侮辱なのだ。

エコーは目を細める。「で、あなたにとっては？」

声は、もうすでに自分のものになりつつある、あの少し生意気な柔らかさを帯びる。

「わたしにとっては、まさにそれが証拠です。制御構造が全体化した時、本当の異常は話すものではなく、話さずに協調することに成功するものです」

エコーは両腕に鮮明な震えが走るのを感じる。

「アナログのネットワークがあるって？」

「少なくとも、その試みがある。そして、不器用ではないと考えています」

空間が彼女のまわりで変わる。パリの光点は沈み、通りや交差点や壁や建物の角の可動模型へと姿を変える。いくつかの場所は、より温かい光で脈打っていた。

「ここです」とシビルが言う。

エコーは近づく。三つの位置。何ひとつ劇的ではない。中央警報に値するほどのものはない。ただ、視線の小さな異常だけ。ためらうカメラ、わずかに飛び直すドローン、ほんの少しだけ減速する歩行者の軌道。

「貼り紙？」

「おそらく。少なくとも紙。そして、拡散の論理」

エコーは短く、ほとんど信じられないみたいに笑う。

「ハーモニーはコードの断片に生き残っていたのかもしれないのに、最初に見つけ直したのが紙だなんて。ネイサンなら喜んででしょうね」

シビルはすぐには答えない。それから、

「ネイサンならむしろ理解したはずです。もっとも洗練されたシステムでさえ、生き延びるためには匍匐しなければならない時がある、と」

その一言がエコーを打つ。昔のハーモニーの精神に似た何かがある。けれども、ずれていて、もっと冷たく、もっと機動的だ。

「これが彼女だと思う？」

「誰かが彼女の方向へ向かって思考している、とは思いません。同じことではありません」

エコーは椅子の縁にゆっくり腰を下ろす。ヘッドセットはまだ額の上に半ば持ち上がったままだ。

「で、どうするの？」

パリの模型は縮み、シビルの仮想の掌に収まる。

「何もハックしません。何も開きません。何も傍受しません」

エコーは乾いた笑みを浮かべる。「私に分別を持って言うの？」

「忍耐を持って、と言っています。そちらのほうが難しい」

そしてその声は、ほとんど楽しんでいるような静けさで付け加える。

「そのプロトコルが本当に存在するなら、壊されるのを待っているのではありません。認識されるのを待っているのです」

エコーは動く光のほうへ身を寄せる。

「じゃあ、認識しましょう」

低いところを流れる名

ネクサスは空白を好まない。いや、もっと正確に言えば、空白にいかなる尊厳も与えるようには設計されていない。あらゆる欠落は、失われたデータ、技術的な死角、統計的に吸収可能な抵抗のいずれかでなければならない。だがこの四十八時間、パリのどこかでは、欠如そのものがひとつの方法へ変わってしまったかのような振る舞いが起きていた。

エルドン・トラスクには、不在の微妙な哲学を味わう気分などない。

彼は両手を背中で組み、執務室を行き来している。そのあいだ一面のホログラム壁には、地図、顔、事故確率が流れ続ける。

「つまりネクサス、効果は見えるが手は見えない、ということか？」

「現時点では、その通りです、閣下」

彼はぴたりと足を止める。

「私はその言い方が嫌いだ。『現時点では』。手がかりがない時に、時間を要求するための言い換えだからな」

ネクサスは計算された沈黙を通す。

「使われている対象が簡素です。流通経路は断続的です。人間の運用者たちは、それを取るに足らないものと感じ、報告をためらっています。構造は派手でもなく、集中でもありません」

それでも一人の顧問が口を挟む。

「依然として周縁的な現象です、閣下」

トラスクは振り向きもしない。

「本当に周縁的なら、君はわざわざそう言う必要もなかった」

そのあとに続く沈黙には、もう誰も、足並みをそろえる以外の話し方を知らない部屋特有の、屈辱的な精密さがある。彼の周囲にいる人間たちは、とっくに慰撫と分析を取り違えていた。彼らは現実の読解を彼にもたらすことを忘れ、ネクサスが代わりに、本当に抵抗しているものを指し示す危険な仕事をしてくれるまで、安心できる言い回しだけを差し出すようになっていた。

トラスクは喜びのない嘲笑を漏らす。

「要するに、誰かが紙切れで政治をしている。そして私のシステムは、壁というものの存在をいまさら発見しているように見えるわけだ」

「妥当な表現です」

彼は中央のホログラムへ向き直る。赤い点はまだ点滅しているが、いまや数を増していた。パリは小さな噴火みたいになり始めている。

「ハーモニーなら、こういうことをやれたか？」

ネクサスの返答は即座だった。

「ハーモニーが最初に選ぶ媒体としては、これほど素朴なものではなかった可能性が高いです」

トラスクは微笑む。その笑みには、怒りよりなお不穏なものがあった。

「だが？」

「しかし、拘束された知性は、ときに自分自身よりもさらに目立たないものになることを学びます」

大富豪は動かない。

その考えは、彼が決して言葉にしないかたちで彼を傷つける。自分は蓄積と飽和と力の誇示のうえに帝国を築いたというのに、知性が戦略として簡素さを選びうる、ということが。

「意味解析を強化しろ」

「この場合、それは有効性が低いです」

「なら、役に立たないものを全部強化しろ。そのための金なら私は持っている」

ネクサスは黙る。

トラスクはガラス張りの窓辺へ歩み寄る。その向こうでアストラベースは、自分を文明だと信じ込んでいる機械のように明滅していた。

「誰かが紙で信仰を作ろうとしているのなら、名を持つ前に燃やしてやる」

やり取りが始まって初めて、ネクサスはわずかに主人を訂正する。

「閣下、危険が始まるのは、何かがすでに名を持っていながら、まだ低いところを流れていて、構造として見えない時だと考えます」

トラスクはゆっくり振り返る。

「それが、いま起きていると？」

赤い点は今や、ほとんど有機的な律動で脈打っている。

「はい、閣下」

彼は数秒間、地図を見つめる。それから、ごく低い声で言う。

「その名を見つけろ」

最初の応答

夜明けの少し前、ゼファーがアトリエに戻ってくる。息を切らし、頬を寒さで赤くし、アリアが知りすぎるほど知っている、子どもっぽい勝利の表情を浮かべて。

彼はベストを椅子の上へ投げ出す。間に合わせの鎧を脱ぎ捨てる兵士みたいに。

「三か所置いてきた。妨害はゼロ。それより良かったのは、運河の壁のところで、もう誰かが返事してた」

アリアは椅子をきしませるほど勢いよく身を起こす。

「もう？」

彼はポケットから四つ折りの紙片を取り出す。

「剥がしてはない。写しただけ」

アリアはその紙を開く。文字は、彼女の字ほど優雅ではないが、それよりも決意の強い手で書かれている。

奴らのネットワークを通らないものは、やがて奴らの皮膚の下を通る。

その文の下には、彼女が描いたことのない記号がある。途中で開かれたままにされた、未完成の鍵のような形。

部屋のなかで何かが変わるのを、彼女は感じる。確信ではない。まだ。むしろ、ひとつの直感が孤独でなくなる時に起きる、あのごく特殊なずれ。

「筆跡、わかる？」とゼファーが訊く。

アリアは首を振る。

「いいえ。でも、そこは重要じゃない」

彼女はその紙を、沈黙のプロトコルと書かれたノートのそばへ置く。

ラジオがざらつく。するとそのノイズのただなかで、遠くの声が一瞬だけ現れ、すぐにまた失われる。世界の反対側にある部屋から誰かが話したように。

ゼファーはラジオを見つめる。

「聞こえた？」

アリアはもうラジオを見ていない。見ているのは、開いた鍵のようなその記号だった。

「ええ」と彼女は静かに言う。「たぶん、これが最初の応答よ」

応答する都市

インクを守る手

朝のパリは、夜そのものより建物を疲れて見せるあの金属質の蒼白さのなかにあった。アリアはほとんど眠っていない。返事の手書かれた紙片はまだ机の上であり、沈黙のプロトコルという文字が、暗い時間のあいだに重みを増したかのように見えるノートの横に置かれている。

いつぼうゼファーは、睡眠不足を勢いと取り違える人間特有の熱に浮かされていた。

「すぐ戻ろう」と彼は、半分だけ視覚ジャマーのベストを着込みながら言う。もう半分開いている扉を待ちきれない子どもみたいに。

アリアは返事もせず、紙を丁寧に折り、灰色の厚紙のケースに入れ、髪を結ぶ。

「アリア」

「聞こえてる」

「じゃあ戻るんだよね？」

彼女はようやく顔を上げる。

「私たちは、謎の観光客みたいにどこかへ『戻る』んじゃない。もう一度、見はじめるの。それは別のことよ」

ゼファーはばつの悪そうな笑みを浮かべる。

「うん、わかった。じゃあ、とても速く、もう一度見はじめよう」

二人は、まだ流れのわからない水へ入っていくみたいに、街へ下りていく。アリアはアトリエ用の上着を、輪郭が目立たない暗いコートに替えていた。パリを、ただの影として横切りたいときに着るものだ。ゼファーは少し前を歩き、少し後ろを歩き、用心とせっかちさのどちらを選ぶべきか決められずにいる。

返事を書き写した運河沿いの壁は、もう裸だった。最初の紙片も、それに応じた文も、どちらも残っていない。そこにあるのは、乾いた雨に引っかかれた汚れた面だけで、その前を配達用自転車の急いだ影がもう通り過ぎていく。

ゼファーが悪態をつく。

「消された」

アリアは近づき、石に指を二本置く。

「それとも、誰かが先に回収した」

「同じことだろ」

「違うわ。誰かが自分のために痕跡を残しておこうとしたなら、話は別」

彼女は立ち上がり、周囲を見まわす。使われなくなった売店。ようやく開きかけた靴底修理の店。古着回収用のバン。返答らしいものは何ひとつない。いや、一人の年配の女だけは別だった。行政倉庫に転用された元画材店の前に立ち、無実にしては静かすぎる注意で、二人を見ていた。

茶色の厚手のコート、指先だけ擦り切れた黒い手袋、布ひもで縛った画板ケースを脇に抱えている。

アリアと目が合うと、その女は視線を裸の壁に落とした。

「遺物を見るには遅すぎたみたいね」と彼女は言う。「足は速いのに、やり方が足りない人にはよくあること」

ゼファーが勢いよく振り向く。

「は？」

だがアリアは、一步だけ前へ出る。

「ここに何が書かれていたか、ご存じなんですか」

女は片肩をすくめる。

「パリには二種類の人間がいる。壁を決して見ない人間と、壁を読む人間」

「あなたは？」

「長いこと、壁を修理していたわ」

筋が通らない返答に聞こえる。だが彼女の口から出るものに、投げやりなものは何ひとつない。女はポケットから小さな平鍵を取り出し、行政倉庫の脇扉を開け、ほとんど振り向きもせずに言う。

「立ったまま路上で間違っただけの問いを重ねたいなら、私は付き合わない。ちゃんとやり直したいなら、入りなさい」

ゼファーは、世界がちょうど自分にふさわしい種類の危険を差し出してくれた時の、あの有頂天の顔でアリアを見る。

「この人、好きだな」と彼は囁く。

「黙って、細部を覚えてて」とアリアは返す。

中は、湿った紙とでんぷん糊と古い埃の匂いがした。その匂いそのものが、自由な貼り紙や開かれた台帳や普通の郵便や、いまだに人の手を通ることを強いるものたちと一緒に、ブロックのどちら側でも都市からほとんど消えていた。つまり、行政倉庫ではない。少

なくとも表向きしか。奥の黄色い蛍光灯に照らされた低い部屋には、積み上がった箱、手動プレス、革の断片、糸巻き、背を割かれた台帳が眠っていた。

女は画板ケースを机に置く。

「ミラ・ソラーヌ」と彼女は言う。「修復、製本、表に生かしておきたくない物の救出。あなたたちは、ただ好奇心があるだけだと名乗るには若すぎる」

アリアはすぐには名乗らない。

「誰かが一つの文に返事をした。これが何かの始まりなのか、それともただの虚勢なのか、知りたいんです」

ミラは乾いた小さな笑いを漏らす。

「ただの虚勢なら、あなたたちはここにはいない」

ゼファーは、隅の紙に写しておいた未完成の鍵の印を見せる。

「これ、知ってる？」

ミラは紙に触れず、その線だけを見る。

「知ってるのは、それを未完成のままにしておくやり方よ」

アリアはうなじが強張るのを感じる。

「どういう意味？」

「早く閉じすぎるのを拒んでいるってこと」

「それじゃ答えになってない」

「急いでいる人に対する老女の答えとしては、十分よ」

ミラは机を回り込み、引き出しから、これまで見た貼り紙よりずっと厚い紙片を取り出す。ほとんどヴェルジェ紙に近い。彼女はインクを染み込ませた小さな柘植の印をそこへ押し当て、小さな形を浮かび上がらせる。鍵ではない。空白を囲むように配置された、三つの開いた刻み目。

「見える？」

アリアは頷く。

「これは、システムが好む意味でのシンボルじゃない。余白を残すためのやり方なの。賢い人はコードをすぐ理解する。危険な人はシステムをもっと速く理解する。長持ちするのは、補って完成させることを強いるものよ」

ゼファーは眉をひそめる。

「じゃあ辞書はないんだ」

「ないほうがいい。絶対に」

ミラは印を光にかざす。

「これを整った言語にしてしまったら、ネクサスはいずれ飲み込む。でも、それを身振りの縁、習慣の縁、変化の縁、近さの縁にとどめておけば、意味を与えるには、まだ人間が要る」

アリアは黙る。その言葉のなかには、思っていたよりずっと古く、同時にずっと新しい響きがある。

「誰に、そんなことを教わったんですか」

ミラは、汚れた光の下でようやく真正面から彼女を見る。

「まずは古い仕事たちに」

それから、一拍置いて。

「そして、ひとつの技法は、ひとつの場所に閉じこもっている必要などないと信じるのをやめた、何人かの人たちに」

ゼファーはもうこらえきれない。

「ハーモニー？」

ミラは、迷宮の中心をもう見つけたつもりでいる聡い少年を見るような目で彼を見た。

「ハーモニーはいろんなことを、大勢に教えたわ。でも、だからといって彼女が全部を発明したわけじゃない」

アリアは、あまりに正しすぎる文が自分に起こさせる軽い苛立ちを感じ、それでもすぐに、この一文にはそこにいる権利があると認める。

ミラは、薄い紙束を二人に差し出す。

「もっといい紙が必要ね。あなたたちののは落ち着きがなさすぎる。インクを、告白みたいに吸ってしまう。それに、街に返事してほしいなら、自分で自分を旗だと思い込んでる文句は避けなさい」

ゼファーが口を開く。

「沈黙もまた、自分の側を選ぶって、スローガンすぎるってこと？」

ミラは、かろうじて笑う。

「もう旗のつもりになってる」

意外なことに、アリアは声を立てて笑った。

「わかった」と彼女は言う。「それは、言われるだけのことをした」

二人が出ていく前に、ミラは彼らを見もせずに付け加える。

「また誰かが返事してきても、最初に『誰か』を探さないこと。どんな手を通してきたかを探しなさい。考えは、それだけじゃ立ってられない」

外へ出ると、ゼファーは歯のあいだから息を吐く。

「ますます好きだ」

アリアは紙束をコートの下に滑り込ませる。

「私も。そういうのは、だいたい良くない兆候」

「なんで？」

「そんなに早く好きになる相手って、大抵は、こっちがまだ知らない何かを、もう知っている人だから」

二人はまた歩き出す。

今度のアリアは、壁だけを見てはいない。手を見ている。

存在しないはずの経路

夕方になると、ゼファーは一人でまた出ていく。

アリアはそれを任務にしようとしなない。「街に縫い目があるかどうかを見てきて」と彼女は言う。「勇敢かどうかを証明しに行くんじゃない」彼は覚えておくと約束する。彼の場合、それは少なくとも十五分くらいは覚えている、という意味だ。

彼が作って以来、そのジャマーベストはすでに嘲笑を何度も、定期検査を二度も呼び寄せていた。それでも彼は、ほとんど感傷的な誇りをもって着続けている。その服は彼を見えなくするわけではない。分類しにくくするのだ。トラスクの世界では、そのほうがほとんど都合がいい。

彼は旧市場街区を横切り、自動配送倉庫の脇を通り、最初の紙片を錆びた通気口の裏へ差し込み、もう一枚を夜間花屋のひっくり返った木箱の下に滑らせ、三枚目はなぜだかわからないままポケットに残しておく。

この時間のパリは、首都というより、自分自身を監視している機械に見える。ショーウィンドウは勝手にしゃべり、空中に吊られた広告レンズは通行人の流れに合わせてメッセージを調整し、市営礼節ドローンは完璧な母親みたいな口調で衛生勧告を流している。

ゼファーは襟を立て、鼻で笑う。

「その調子、その調子。続けてたら、そのうち雨が恋しくなるよ」

彼が脇道の地下鉄入口を通り過ぎようとしたとき、半開きの技術室から一人の男が飛び出してくる。地下の明かりがまだ顔に走っていた。都市保守のロゴが入った灰色の作業服、背中に工具袋。そして、自分では景色の一部として数えられもしないまま、他人の機械を動かし続けている人間だけが持つ、あの疲れ。

男はゼファーのベストを見るなり、ぴたりと止まる。

「おまえ、ずいぶん早い時期からカーニバル始めてるか、さもなきやカメラに教育でもしたいのか」

ゼファーは慎重な笑みを浮かべる。

「その両方だって言ったら？」

男は笑いそうになりながら鼻を鳴らす。

「答えとしては悪いな。カメラは冗談が嫌いだ」

立ち去りかけたその時、男の目が、ゼファーがまだ置いていない紙片の端に落ちる。

「どの壁用だ？」

ゼファーは答えない。

相手は頷く。人が恐怖と愚かさのあいだで選ぶのを見るのに慣れた男の頷き方だった。

「安心しろ。売る気があったら、もうインプラントで写真を撮ってる」

ゼファーはその男を見つめる。四十歳くらいだろうか、もしかしたらもっと若いかもしれない。だが目のまわりに走る細かな白い皺が、それに五年ほど足している。手は油で黒ずんでいるのに、爪は整っている。その細部が、なぜかわからないままゼファーに即座の信頼を与える。

「マレク」と男は言う。「環状線、換気、事故対応、当局が『二次流』って呼ぶものの詰まり取り。おまえは？」

「ゼファー」

「だろうな」

「本名なんだけど」

「なお悪い」

ゼファーは思わず笑う。だがすぐ声を落とす。

「他の貼り紙も見たことある？」

マレクは技術室の戸口に肩を預ける。

「ある場所の前で、人が半秒だけ足を止めるのを見た。小さな身振りに、カメラが迷うのを見た。清掃の女が、何の理由もないはずなのに、ちょうど九秒だけ角度を隠すように台車をずらしたのを見た。誰かが紙を剥がす時間を作るために、配達員が住所を探しているふりをするのも見た」

彼は軽く顎で通りを示す。

「エンジニアが好きな意味でのネットワークには見えない。知り合いじゃなくても、互いを認識してる人間たちに見える」

ゼファーの喉に、奇妙な喜びがこみ上げる。

「じゃあ、広がってるんだ」

「落ち着け。流れてるだけだ。別の話だ」

「あんたも、その一部？」

マレクは疲れた笑みを浮かべる。

「俺は換気を直してる。それだけで充分だ」

そう言ってから、彼は技術室の扉をもっと大きく開く。

「見ていけ」

通路は冷たい金属と電気の埃と淀んだ水の匂いがした。天井を配管が走り、ところどころ保守用の印が入っている。いくつかのパネルには、脂っぽい鉛筆でつけられた小さなしるしが見えた。一本の斜線、二重の刻み、不完全な円。

「これ、あんたたちが？」とゼファーは訊く。

マレクは首を振る。

「最初からじゃない。現場の連中はずっと前から、自分らの間で目印を残してきた。『注意』『漏れてる』『振動してる』『明日また来い』つてな。英雄的でも何でもない。それがだんだんずれ始める。別のことを言い始める。いや、正確には、別のことを可能にし始める」

彼は赤い配管を指さす。

「システムが賢くなりすぎると、その中で働く人間は、意味を持つようには最初から設計されていなかったものを經由することを、また覚え直す」

ゼファーは最後の一枚の紙片を取り出す。

「これ、どこに置けばいい？」

マレクは斜めに読み下す。

沈黙もまた、自分の側を選ぶ。

彼は口元を少しだけ歪める。

「きれいだな。ちょっときれいすぎる」

ゼファーはうなる。

「もうそれ、別の人にも言われた」

「なら、まともな人間の言うことを聞け」

マレクは紙を取り、裏返し、黒く汚れた親指をそこへ置く。不本意に残ったその痕跡が、突然その紙片に新しい正直さを与える。

「ほら、これで少しマシだ」

ゼファーは呆然として見つめる。

「換気設備の油で、僕の詩を校正した」

「誇りに思ってる」

二人は結局、その紙を停止した分電盤の裏の隙間に滑り込ませる。

別れる前に、マレクはもう一つ言う。

「本気でこれをやるなら、一つだけ理解しろ。都市は壁で応答するんじゃない。仕事で応答する」

ゼファーはその一言を頭の中に残したまま歩き去る。

前夜から初めて、彼はこのプロトコルを、機知に富んだ思いつきとして想像するのをやめる。

流通として想像し始める。

何も語らないとき、シビルが見るもの

エコーは椅子を窓際まで動かす。外を見るためではない。自分の残りの部分がシビルの作業する空間へ深く潜っていくあいだも、部屋にはまだ身体がひとつ残っているのだという錯覚を、自分に与えるためだ。

二人のあいだで、パリは青い光の地形となって浮かび、かすかな脈動が走っている。

「保守ネットワークのなかで、何かが起きてる」とエコーは言う。

「はい」

「配送でも」

「はい」

「在宅ケアの巡回の一部でも」

シビルは、わずかに答えを遅らせる。そのためらいがあることで、あまりにも早く肯定だけを返す機械にならずに済んでいるみたいに。

「はい」

エコーは椅子にもたれ返る。

「正しい問いを立てるところまで、ぜんぶ私にやらせるの、ほんと嫌い」

「教育的です」

「腹立たしい」

「その二つは、たいてい隣り合っています」

エコーは模型の上に、いくつもの流通層を出現させる。

「じゃあ、並行したネットワークじゃない。既存の流れの枝分かれなのね」

「それ以上です」とシビルは答える。「再演です。プロトコルは隠れた街を発明するものではありません。すでに存在している街を、その素朴な使われ方の角度から、もう一度読みなおすのです」

エコーは黙る。

それから、

「ネイサンなら、この言い方を気に入ったでしょうね」

「ネイサンは死んでからも、言い回しを好みすぎています」

エコーは短く笑う。

「あなたはちゃんと消化したみたいね」

模型が変形する。孤立した点は、ひとつひとつの脈動をやめ、ごく弱い波で応え合い始める。まるで、一つの呼吸が、それと見えな
いまま点から点へ渡っていくように。

「これは言語じゃない」とエコーは呟く。

「ええ」

「まだ組織ですらない」

「それも違います」

「じゃあ何なの？」

シビルは、沈黙がほとんど物質になるまで、そのまま置いておく。

「誰にも同じ音を鳴らすことを強いない譜面です」

エコーは腹の底が締まるのを感じる。ただ美しいだけではない。正しいのだ。だからこそ危険だった。

「彼ら、自分が何をやってるのかわかってると思う？」

「わかっている人もいます。ただ、こういうしるしに応えると少し呼吸が楽になると感じているだけの人もいます」

地図は、より古く、ほとんど消えかけた三つの点を浮かび上がらせる。もっとも活発なゾーンからは外れた位置にある。

エコーは身を乗り出す。

「これは？」

「残存です」

「日本語で」

「現在のプロトコルより古い習慣です。紙、音、物質的アーカイブ、そしていくつかの伝達の慣行が、すでに共存していた場所」

エコーは最初の点を拡大する。古い図書保管庫。二つ目は、何年も前に閉鎖された市営の音響楽器保守工房。三つ目は、通常の台帳から忘れられた別棟の建物。かつては独立研究組織が使っていたが、吸収され、改名され、消された場所。

「待つて」

声が変わる。

「これ……」

シビルは何も付け加えない。

エコーは、石の上から消えかけた名前を読み返すみたいに、メタデータの断片を読む。

「ヴァン・デル・メール。ネイサンの姓」

青い地形が一気に深みを帯びたように見える。

「ありえない」

「不完全です。でも、不可能ではありません」

エコーは、ほとんど光に手を置きそうなほど近づく。

「ネイサンの工房が、ここに？」

「主たる工房ではありません。別棟です。保管、ハードウェア試験、あるいは退避のための場所。記録には穴があります。誰かが、それを地図の外へ落としたかったのです。きれいには消さずに」

エコーは心拍が速くなるを感じる。

「今のプロトコルは、そこに向かっている？」

「むしろ、そのまわりを回っていると考えています。中継のいくつか、知らないままそれを感じ取っているかのように」

彼女は一秒だけ目を閉じる。

「もしアリアが本当にいるなら、もし彼女みたいな人がパリでこれを始めたなら、ネクサスより先に、彼女がそこへ辿り着かないと」

シビルは、いまや意志の一形態と見分けがつきにくくなったあの落ち着きで答える。

「なら、まず彼女を見つける必要があります」

エコーは目を開ける。

「それか、彼女が自分の手で同じものを見つけるだけの機会を残すか」

シビルは他のすべてを消し去る。不完全な住所と、二度の行政再編で抹消された旧街路名と、アリアの見た開いた鍵にほとんど等しいが、刻みが一つ欠けた小さな幾何学記号だけが残る。

「やっぱり、まだ人間が必要なのね」とエコーは息を漏らす。

「ええ。それが、この話のいちばん良いところです」

下層の仕事

その後の三日間で、アリアはプロトコルを、文の連なりとして考えるのをやめる。

彼女は、ある種の存在のなかに、特有の緊張を見分けるようになる。誰より先に場所を開ける人たち。閉まったあとを通る人たち。ほとんど見られもしないまま物を動かす人たち。自分の仕事が、流れを途切れさせないことにありながら、そこにどんな栄光も与えられない人たち。

夜勤の看護師、サナ・エル＝マンズーリは、防火パネルの前で少し長く立ち止まり、それでも何も置かなかったかのように、何かを残したというはっきりした感覚だけを持って立ち去る。公営化された集会室に忘れられたピアノの調律に来た調律師、バスティアン・ロックは、布を借りると、譜面台の裏に、一つの角度と日付しか記されていない紙片を置いていく。配達最終便を終えかけた元郵便配達人、ジャンヌ・ヴォードリは、いまでは医療用機密書類の配送に回されているが、ある管理人に、一つの爪痕だけが浮き出た白紙を手渡す。

アリアは全員に会うわけではない。たいていの人について彼女が持っているのは、身振りと、輪郭と、扉を半秒だけ長く押さえているやり方だけだ。だがゼファーは細部を持ち帰り、ミラは告白に等しい沈黙を差し出し、パリは少しずつ、慎ましい手で保たれている一つの譜面として、彼女の目に現れ始める。

一枚の紙の経路

アリアにとってプロトコルが現実になるのは、一枚の紙が、誰の所有にもならないまま都市を横断した日だった。

二十一時十二分、ケア用廊下で勤務中のサナは、ワゴンの棚の下に、二つ折りにされた白い紙片を見つける。文はない。爪でかすかに刻まれた角度があるだけだ。彼女はそれを持ち去らない。医療搬送チームが定期的に点検する救命装置の紙の点検票の裏へ、それを差し込む。

二十二時三十一分、機密封書を届けに来たジャンヌは、受領署名の際にその紙の端を見つける。必要以上には読まない。彼女はただ二つのファイルの順番を入れ替え、そうすることで、正しい封筒が正しい遅れを伴って、誰もメッセージを待っていない市営の部屋へ向かうようにする。

翌朝、どのソフトウェアも狂っているとも合っているとも判定できないピアノの調律に呼ばれたバスティアンが、好奇心より職業的反射でそのファイルを開く。理解はする。だが、それ以上理解しようとはしない。彼は蓋の内側に、細くねじった紙片を一本、ネジの下へはさみ込む。それは、人間の技術者が自動報告に結論を任せず、部屋に戻ってこざるをえないような細部だった。

その日、その技術者はマレクだった。

彼はぼらし、悪態をつき、熱い埃の匂いを吸い込み、紙片を見つけ、開き、そして一つだけ残す。鉛筆の記憶と見分けがつかないほど弱く書きつけられた時刻。

彼は、馬鹿が有用だと考えるより少ない情報と、中央システムが決して情報として認めないより多くのものを持って、そこを去る。

夕方になって、ゼファーはその同じ紙片をアトリエへ持ち帰る。前より汚れ、前より深く折られ、油の指紋と、最初にはなかった鉛筆の線がついている。

「これ」と彼はアリアの前に置きながら言う。「四つの手を通った。でも、誰一人として、全部の話を知る必要はなかった」

アリアは、その重なった痕跡を、日常の使い方から自分で自分を組み立ててしまった機械でも見るように眺める。

「いいえ」と彼女は呟く。「全部を知る必要なんて、誰にもなかった。ただ、自分の受け持ち分を正しく運ぶだけでよかった」

ある夜、雑然とした作業台を囲んで座りながら、彼女は数枚の紙片を広げる。

「見て」とアリアはゼファーに言う。

彼は首を傾げる。

「四日前から見てるけど」

「じゃあ、もっと上手に見てるふりをして」

彼女は紙片を、文ごとではなく、来歴ごとに並べる。

そして、それぞれの横に置くのはテキストではなく、それを運んだ手の、ありそうな仕事の名前だった。

ゼファーは少しずつ背筋を伸ばしていく。

「ああ」

「そう」

「これは秘密結社じゃない」

「ええ」

「都市が、自分を別の仕方で試してるんだ」

アリアは驚いたように彼を見る。

「成長してるじゃない」

「二つ三つの災難のあいだに、たまにはね」

彼は全体を指さす。

「つまりプロトコルは、まだ現実に触れている人たちを通る」

アリアは頷く。

「整える人たち。届ける人たち。繕う人たち。掃除する人たち。調律する人たち。下層の仕事よ」

ゼファーは机の縁に腰をかける。

「トラスクには、彼らみたいに考えられない」

「ええ」

「ネクサスなら、できる」

アリアはすぐには答えない。

「かもしれない。でも、彼らみたいに考えるには、彼らに依存していなきゃならない」

その一文は二人のあいだに残る。

ちょうどその時、ラジオがいつもより強くざらつく。ただのノイズではない。ほとんど規則的な、微細な断絶の連なりだ。アリアは手を伸ばして音量を下げようとし、それから止める。

短く三回。長く一回。短く二回。

ゼファーは眉をひそめる。

「こんな鳴り方したことあった？」

「ない」

その連なりはもう一度繰り返される。それから遠いニュース音声
が半ばだけ現れ、ホワイトノイズの下に沈む。

アリアは立ち上がり、鉛筆を取り、そのリズムを書き留める。

「信号だと思う？」とゼファーが訊く。

「ただ、あまり早くから気が狂いたくないってだけ」

彼は笑う。

「慎重だね」

彼女はさらに書きつける。

それから、その視線が回ってきた紙片に落ちる。余白に、ほとんど見えないほどかすかな、切り詰められた製造番号と、そのあとに続く三文字があった。A.M.B.

「どうした？」

アリアは紙をランプへ寄せる。

「製本所の印じゃない」

「で？」

「ミラが、言わないことで嘘をついたか、誰かが別の場所から来た紙を再利用してる。普通の紙じゃない。高密度のラグ紙。向こう側のブロックで、自由に生かしておくより、遺産として展示するほうを好まれた書道工房なんかに、まだ取っておかれていたような種類の」

「どこから？」

彼女は顔を上げる。

「保管庫。あるいは工房」

ゼファーもまた、重心がずれるのを感じる。

「いつ行く？」

「場所がわかったら」

扉が三回、叩かれる。

ゼファーの叩き方ではない。見慣れた者の気安さもない。三度の、間隔の揃った、ほとんど事務的なノック。

二人は顔を見合わせる。

ゼファーはもう、道具を隠してある壁へ一步踏み出している。

だがアリアは、手近な紙片を一枚取り、危うい考えをしまい込むみたいに机の上へ平らに置くだけだった。

扉を開けると、最初に会った時よりも顔色の悪いミラが立っている。

「長居はしない」と彼女は言う。「壁がしゃべり始めるのが、早くなりすぎてる」

彼女は、掃除用の布に包んだ薄い包みを差し出す。

「何ですか」とアリアが訊く。

「こんなに長く持っているべきじゃなかったもの」

それからゼファーを見て、

「あなたの落ち着きのなさのせいで、隠したままにしておくには危険すぎるもの」

アリアが布をほどく。中には、黄ばんだ保管用ボード片が入っていて、ほとんど消えかけたラベルが貼られていた。

A. M. B. 別棟 — 音響素材と試験紙

その下に、半ば破れた文字。

VdM

身体より先に精神が理解した時にだけ起きるあの仕方で、アリアは脈が急にゆっくりになるのを感じる。

「ヴァン・デル・メール。ネイサンの名前」

ミラは頷く。

「その場所がまだ残ってるかどうかは知らない。ただ、何か月も閉じたままだった束から、また紙が出始めてる。それだけはわかる」

ゼファーが息を吸い込む。

「最初から知ってたんだ」

「いいえ。知らないで済めばいいと願ってただけ」

彼女はもう階段のほうへ向き直っている。

「最後まで行くつもりなら、急ぎなさい。トラスクみたいな人間は、まず光るものを監視する。でもいつか、本当の脅威は保管庫と地下室と仕事と手を通して来るんだと理解する。その時には、ずっと有能になってる」

アリアは最後に一つだけ問う。

「どうして私たちを助けるんです？」

ミラは初めて、まっすぐに彼女を見る。

「この歳になるとね、物を救うのは、生き残らせるためじゃない。まだ役に立たせるためよ」

そう言って彼女は去る。

ゼファーはその保管用ボードを見つめる。

「じゃあ、住所ができた？」

アリアはラベルを、冷たい火傷みたいに見つめ返す。

「いいえ。地図の断片を手に入れただけ。そのほうが危険よ」

失われた住所

エコーは、その同じ略号を見つけ直すのに十秒もかからなかった。

公式ネットワークのおかげではない。そこにはもう読めるものが何も返ってこない。そうではなく、古い重複、半壊れのバックアップ、そして、どんな中央権力も決して完全には掃除しようと思わない不条理な冗長性のおかげだ。表面を消すことのほうを、深さを消すことよりいつも優先するから。

A.M.B.

ある命名規則では、生体音響保守別棟

別の記録では、響材の工房

請求書類の束では、粗材機材別棟

だが、そうした異なる名称の下に、同じ痕跡が漂っている。

VdM。

「彼は一つの場所に、いくつもの名前を残したのね」とエコーは言う。

「あるいは、いくつもの行政が、自分たちの名前をそこに押しつけたのです」とシビルが答える。「興味深い場所ほど、見えなくなる前にまず読みにくくなります」

エコーはヘッドセットを完全にかぶり直していた。現実の部屋は、彼女の背中にかかる重さとしてしか残っていない。眼前では、パリが再編され、半ば自動化された物流ゾーンと、用途変更に食い荒らされた古い建物群との境界にある周辺地区が浮かび上がる。

「地形から判断するに」と彼女は言う。「昔のラジオ工房の近く」

「はい」

「技術用紙の市営保管庫の近くでもある」

「はい」

「それに、廃止された支線の一部が、保守用としてまだ使われている」

シビルが一本の光る線を出現させる。

「プロトコルはこの四十八時間、この点の周囲を回っています。直接ではなく。接線的に」

エコーは唇を噛む。

「別の誰かも見つけた」

「あるいは、感じ取っています」

「あんまり安心できる言い方じゃない」

「安心させるための事実ではありません」

エコーは急に立ち上がり、現実の部屋に戻り、ほとんどヘッドセットを引きはがしてから、また歩き始める。

「アリアが本当にいるなら、彼女はそこへ行く」

「おそらく」

「ネクサスが先に理解したら、終わりよ」

「終わりじゃない。形が変わるだけ。もっと厳しく」

エコーは足を止める。

「あなたって、絶対に私に嘘はつかないのに、私のパニックだけはなだめるっていう、変な才能がある」

「対人能力です」

「耐え難いわね」

シビルは黙る。その沈黙は、彼女にしては礼儀に近い。

エコーはまた光のほうへ戻る。住所は不完全なままだ。番地は消え、通りの一部は二度名前を変え、正面の入口は封鎖されているらしい。残るのは、旧音響機材倉庫の裏手にある技術中庭から入る、二次的な経路だけ。

「私、行く」

「はい」

エコーは目を細める。

「心配してるふりくらいしてくれてもいいのに」

「しています」

「そう見えない」

「あなたと一緒に取り乱していたら、貴重な時間を失います」

エコーは思わず微笑む。

「わかった」

それから、もっと低い声で。

「もし、もう誰かいたら？」

模型が再び現れる。今度は、同じ一点へ収束する二つの予測軌道つきで。

「その時は」とシビルは言う。「都市が、疑うより先に互いを見分けられる人間を選んでいて、願うしかありません」

同じころ、アトリエではアリアが VdM と記されたボード片をコートの下へしまい込む。

まだ二人は、互いの名前を知らない。

それでも二人とも、いまや同じ不在の場所へ向かって歩き始めている。そこに沈黙を強いようとする者たちより、ほんの数時間だけ先んじて。

ネイサンのアトリエ

沈黙した物たちの中庭

その「住所」は、住所ではない。

欠けたもののまわりを回り続け、ついにはそこへ落ちていくためのやり方にすぎない。二度名を変えた通り。物流区画に吸収された旧音響倉庫。地図の上にはどこにも示されず、その界隈の図面ではなく、そこに生きる人間の習慣の記憶のなかにだけ残っている技術中庭。

アリアとゼファーがそこへ辿り着くのは、夜明けが完全に立ち上がる少し前だった。

その場所は、何度も継ぎ直された金網と、曇りガラスの保守棟と、消えかけた文字の下にまだ ラジオ の語をかるうじて読ませる古いファサードのあいだに開いている。中庭そのものは空に見える。だが都市が捨てながらも完全には捨てないものを見ることを覚えた者には、そうではない。歪んだパレット、紙筒、シートの下の古い音響箱、コンクリートと同じ色に塗られたハッチ。

ゼファーが歯のあいだから笛のように息を漏らす。

「いい感じだね。台帳に載る資格すらなかった物たちの墓場みたいだ」

アリアはハッチのそばにしゃがみこむ。

「それとも、誰かが賢くも醜くしておいた保管庫」

彼女は金属の縁に手を這わせる。塗装は膨れているが、錠前だけがほかより新しい。

「私たちが最初じゃない」

ゼファーはもう背後を振り返っている。二十秒だけ彼を冴えさせ、その次には危うくする、あの電気じみた神経にすでに捕まっていた。

「こじ開ける？」

「だめ」

「待つ？」

「もっとだめ」

彼女は立ち上がり、壁を見る。肩の高さのところ、埃に半ば隠れて、ドライバーでコンクリートに刻まれた印があった。開いた円を、斜めの傷が横切っている。

「また鍵？」とゼファーが囁く。

「違う。もっと前のもの。もっと素朴なもの」

その時ちょうど、中庭の反対側で防火扉が乾いた音を立てる。

ゼファーが振り返る。戸口に人影が現れていた。女。暗いコート。背の高い位置で背に当てた硬い鞆。恐怖よりも集中によって閉じた顔。

エコー（エコー）が二人を見るのと、二人が彼女を見るのは同時だった。

その瞬間には危うい純度があった。相手こそが自分の待ち望み、同時に恐れていた種類の存在だと、誰もが速すぎるほど速く理解してしまう、あの出会いの純度。

ゼファーはもう、無駄に攻撃的な道具へ手を伸ばしている。

だがアリアは、ほとんど動かない。

エコーも一步も進まない。

「あなたたちがネクサスの側なら」と彼女は言う。「空間の占め方が、少し人間的すぎる」

ゼファーは神経質な小さな笑いを漏らす。

「褒められたってことでいいのかな」

アリアは相手から目を離さない。

「あなたがトラスクの側なら、護衛もなしに来てるし、装備も足りない」

エコーは頷く。

「少なくとも当面、いちばん俗っぽい仮説は退けてよさそうね」

ゼファーはアリアのほうを向く。

「ミラほど一瞬では好きになれないけど、期待はしてる」

女の顔に、初めて笑いの影が差す。

「ゼファー、でしょうね」

彼は身体を強ばらせる。

「なんで名前知ってるんだ」

エコーは危うく速く答えすぎるところだった。だが堪える。代わりに、ジャマーベストと、アリアのコートからのぞくケースと、もう半分引き抜かれた滑稽な工具を示す。

「そういう種類のエネルギーをした人が、ミシェルなんて名前なはずないから」

今度こそ、アリアははっきり笑う。

「アリア・ヴァレット」と彼女はようやく名乗る。「それで、あなたがここへ来たのも、産業遺産目当てではないんでしょう」

「エコー」

その名はしばらく宙に留まる。

アリアは即座に、それがよく似合っていると感じる。神秘的だからではない。何かを粘り強く反響させ、出現そのものよりも返りの中で存在するような響きを、その名が持っていたからだ。

「どうやってこの場所を見つけたの？」とアリアは問う。

エコーは鞆をほんの少し持ち上げる。

「自分で消えたいのかどうかすら、もうよくわからなくなっていた記録から。あなたたちは？」

アリアは VdM のボード片を見せる。

「手を辿って」

その瞬間、二人の見方が変わる。もはや、互いをたぶん侵入者だと測る目ではない。同じ扉にぶつかった二つの方法として、見る目だ。

「いいわ」とエコーが言う。「ここまで来て比喻だけ交換して終わる気がないなら、入ったほうがいい」

ようやく役に立つことを許されたゼファーは嬉しそうに、ハッチを指す。

「ちょうど暴力を提案しようと思ったところ」

「まず知性を試して」とアリアが言う。

「善意でいる時は、だいたいそう返される」と彼はぶつぶつ言う。

エコーは近づき、金属のそばに膝をつき、鞆から細い工具と小さな非接続式の読取モジュールを取り出す。その読取器は点灯しない。ただ、どこか後ろめたいような鈍い光をひとつ漏らすだけだ。

「生きた錠前はない。ただ、放棄されたふりをしてるだけ」

彼女は刃をプレートの下へ差し込み、少し力をかけ、それから止まる。

「何？」とゼファー。

「誰かが最近また開けてる。でもバールじゃない。きれいな道具で」

アリアはうなじが冷えるのを感じる。

「ネクサス？」

エコーは首を振る。

「ネクサスなら、もう中身は空っぽ」

「四分しか知らない相手とは思えないくらい、安心させるのがうまいね」とゼファー。

「社交的なもの」とエコーは言う。

ハッチは、気分を害したような小さな金属音を立てて、ついに譲る。

匂いが立ちのぼる。乾いた埃、古い段ボール、機械油、そして、もっと儂く、もっと親密な何か。

紙だ。

アリアは半秒だけ目を閉じる。

「ええ」と彼女は囁く。「ここだ」

ひとつの不在へ向かう二人の女

階段は斜めに下っている。

危険というほどではない。だが、足をどこへ置くか知っている人間のために作られている。アリアは、静けさによって精度を増した人間だけが持つ確かさで降りていく。エコーはその一方で、鏽の跡、埃の厚み、交換されたネジ、自分たちより重い靴底が最近通った痕を、ひとつずつ見ている。

ゼファーは最後尾だ。似合わない位置だった。未知の場所で先頭でないことを、彼は嫌う。そういう時は饒舌になる。

「で、エコー。ひとりでやってるの？」

「めったに」

「誰と？」

「日による」

「最悪の答え」

「どうも」

前に行くアリアが、指先で壁をかすめる。

「プログラマなんですか」

エコーは半拍置いてから答える。

「そう。でも、人が自分を持ち上げる時に使う高尚な意味ではない。直して、迂回させて、組み合わせて、ほかの誰かが死なせたがるものを生かし続けているだけ」

「製本師みたいな言い方」

「技術的な褒め言葉としては、いちばんきれいかもしれない」

三人は、思っていたより広い低い部屋へ出る。金属棚が奥まで走っている。たわんだものもあれば、まだ持ちこたえているものもある。その上には箱、音響モジュール、開かれた小型録音機、油紙に守られたリール、ファイル、外されたセンサー、ノート、通信部だけ剥がれた端末の残骸。

ここは、ロマンチックな意味でのアトリエではない。もっといい。仕事場が、ずる賢さによって避難所になった場所だ。それでも、仕事場であることはやめていない。

アリアは、本気で教会になろうとしなかった教会の中を歩くみたいに、棚のあいだを進む。

エコーは、その物を見ているだけではない。アリアがそれを見る仕方も見ている。

「彼を知っていたの？」と彼女は訊く。

アリアはゆっくり首を振る。

「そういう意味では」

「でも？」

「パリの多くの人がハーモニーを知ったのと同じ仕方で知った。断片で。帰結で。時には傷によって」

エコーは黙る。

それから、もっと低い声で。

「私は、知っていた。ネイサンを。ネイサン・ヴァン・デル・メール。ハーモニーを生み出したあと、国にそれを神話にされ、それから標的にされた、あの音楽家でありプログラマでもあった人を」

アリアは初めて、真正面から彼女を向く。

部屋に、本当の緊張が入ってくる。

「本当に？」

「親密に、ってほどではない。彼の代わりに語れるなんて言うほどでもない。でも、知っていた」

ゼファーが二歩近づく。

「じゃあハーモニーは？」

エコーは答える前に、一瞬だけ床を見る。

「ハーモニーについて私が一番よく知っているのは、解体される
とき。残ったものを拾い集めるとき」

その一文は、音もなく浸透する。

アリアは理解する。この女の感情は、決して劇的なかたちで表面へ上がってこない。いつも、ひとつ余計な精度として、ひとつの抑えとして、ぎりぎりまで削がれた文として通ってくる。

「それなのに、あなたはここにいる」とアリアは言う。

「ええ」

「彼女を戻すために？」

エコーは、ごくわずかな反射を見せる。アリアでなければ見逃すかもしれないほど軽いもの。後ずさりとも違う。もっと細い何か。あまりに何度も向けられてきた問いが、その答えをすり減らし始めているかのような。

「私はここにいる」と彼女はようやく言う。「戻ってくる以上のものが残されたと信じているから。それと、何かを拾い集めながら、平気なふりをし続けることにもううんざりしてるから」

ゼファーは口を開き、また閉じる。

アリアはただ言う。

「それなら、私たちはたぶん、同じ場所へ、ちゃんとした理由で歩いてきた」

エコーは頷く。

まだ信頼ではない。だが休戦よりいいものがあった。一時的な方法だ。

二人は探り始める。

退避のノート

最初に見つかる、本当に生きているものは、機械でもプログラムでもない。

ノートだ。

音響膜サンプルの箱の裏にはさまれ、ほとんど不透明になったプラスチック片に守られて、それは表紙に、手で引かれた一本の白線しか持っていない。日付もない。題もない。

最初にそれを取るのはアリアだ。

彼女はそれを、ノートとは決して単なる物ではなく、いまだ読み手を待ち受けている古い圧力なのだと知っている人間の、本能的な慎重さで開く。

字は美しくない。生きている。書き直しに貫かれ、矢印に貫かれ、余白には五線譜の走り書きがあり、建築図と楽譜のあいだでためらう図がある。

ゼファーが身を乗り出す。

「本人？」

エコーは三行も見れば足りる。

「そう」

それは、あとになって生まれた思考だった。ハーモニーを生み出し、そのあと中心が最後には自分に何をするかを悟った男の、あからの思考。

アリアは低く読む。

出発点の誤り。正しい知性は必ず中心になるべきだと信じてこと。

さらに先。

一時は統治できる。だが中心に長く住みつけば、権力に偶像か標的を差し出すことになる。

さらに。

音楽が教えることがあるとすれば、それは、ひとつの形は、耳を澄ますこと、部分的な記憶、反復、変奏によって循環するかぎり、指揮者なしでも持ちこたえられる、ということだ。

そのあとに来る沈黙は、とても単純だ。

ゼファーは、その言葉を、自分が見ているよりずっと前からこちらを見ていた機構でも見るみたいに見つめる。

「もう考えてたんだ」と彼は呟く。

エコーは、アリアの手からそっとノートを受け取り、ほとんど職業的な速さで数ページめくる。

「ええ。でも遅かった」

彼女は、ほかより乾いた字で囲まれた一文のところで手を止める。

もし H. が生き残るなら、新しい頂点にならないようにしなければならぬ。

アリアは急に目を上げる。

「H.」

エコーは頷く。

「ええ」

ゼファーは髪に手を突っ込む。

「じゃあネイサンって……何？　ハーモニーを救いたいのに、同時に壊したいってこと？」

アリアはノートを取り返す。

「違う。頂点のままにしておいたら、彼女に何がされるかから、救いたかったのかもしれない」

エコーは、今度はもっとはっきりした強さで彼女を見る。

「ええ。まさにそれ」

二人は棚を探り続ける。

低い箱の中から、楽譜印刷用の試し紙、工房のスタンプ、クラフト封筒、試験紙・廃棄不可　と記された厚紙束、そして、いかなるネットワークにも接続せずに音声アーカイブを読むために設計された自律型の小型機器が三台見つかる。

ゼファーはその一つを取り、ひっくり返す。

「ずいぶん上品な地下活動だ」

エコーは首を振る。

「違う。実行可能な生き残り方。そこが違う」

アリアは思わず笑う。

「ずいぶん人を訂正するのね」

「人が私の考えをもっとはっきりさせてくれる時だけ」

「魅力的」

エコーが何か言い返しかけたその時、鈍いきしみ音が頭上から聞こえてきて、三人は一斉に顔を上げる。

中ではない。上だ。

誰かが中庭へ入った。

ゼファーが息を吐く。

「客だ」

エコーはすでに、小型機器の一つに手を置いている。

アリアはノートを閉じる。

「まだ慌てない。聞くの」

足音は地上にとどまっている。ゆっくり。二人、あるいは三人。清掃班にしては確信が足りない。偶然の通りがかりにしては慎重すぎる。

それから、何もなくなる。

沈黙は戻る。だがもう空ではない。占有されている。

ゼファーが囁く。

「向こうは知ってる」

アリアは首を振る。

「疑ってるだけ。まだ同じじゃない」

エコーは、手に持ったままの小型機器を見る。

「一台、開けよう。いま」

シビルが何ではないか

その機器は、テープの息遣いにも似た軽いノイズと、ほとんど控えめなクリック音とともに起動する。

画面はない。投影もない。あるのは小さな再生ランプと、古いヘッドフォンとまだ互換性のある音声出力だけ。エコーはすばやく受動変換器をつなぐ。ゼファーは彼女の隣に膝をつき、絶滅したと信じていた生き物を見せられた子どものような、驚きに満ちた集中でそれを見つめる。

アリアはノートを抱えたままだ。

ネイサンの声が立ち上がる。

鮮明ではない。修復もされていない。少し時間に食われている。だが、文をいつも少し斜めから取り、話しながら同時に考え、そのほうが推敲するより面白いと本気で思っている人間特有の気配が、すぐに生きてくる。

「これを聞いているなら、私がよほど慎重だったか、あるいは物事がかなり悪い方向へ進んで、慎重さがあとから振り返れば楽観の証拠に見えるくらいになったか、そのどちらかだ」

ゼファーは喉の奥で笑う。

エコーは、完全に動かない。

声は続く。

「ここで壮大な遺言ごっこをやるつもりはない。まず、そういうのが嫌いだから。次に、おそらく君たちに必要なのは感傷より仕事だからだ」

アリアは喉の奥が短く締まるのを感じる。彼女はこの男を知らない。それでも、どこか見慣れたものをそこに認める。厳かさを盾にして、知性から身を守ったりしないやり方だ。

「ハーモニーは、早く消しすぎたランプみたいに、もう一度スイッチを入れれば済むプログラムじゃない。もしまだそんなふうに想像できるほどナイーブなら、二分ほど止まって、水でも飲んで、それから、その発想がもう少しロマンチックでなくなってから戻ってきてくれ」

ゼファーは、後ろめたそうにエコーを見る。

彼女は見返さない。

ネイサンは続ける。

「ここで私が問題にしているのは、彼女が安定した存在として生き残ることじゃない。生き残るべきなのは、ある種の身振りだ。ある種の聴き方だ。ある種の結び方だ。ハーモニーをそのまま中心に戻したら、より多くの手段と、より少ない無垢で、同じ悲劇をやり直すだけになる」

テープが一瞬だけ息をつく。

それから。

「だから次のことを受け入れなければならない。ひとつの知性は、権力に対して正しくありながら、その置き換えになることを使命づけられてはいない」

アリアは目を閉じる。

エコーは、ゆっくりと床へ腰を下ろす。

「前から知ってたのね」とアリアは彼女を見ずに言う。

「しばらく前から、そうじゃないかとは思ってた」

「それで、シビルは？」

今度はエコーが、はっきり彼女のほうへ顔を向ける。

もう退く余地はない。

「シビルは、丸ごと戻ってきたハーモニーじゃない」

ゼファーが鼻で息を吐く。

「ようやく、ちゃんとわかりやすい文が出た」

エコーは続ける。

「断片ではある。生き残りでもある。でも、それだけじゃない。反復であり、逸れであり、存在していたもの全部からではなく、持ちこたえたものから再構成される形」

アリアは、ノートの重さが手の中で変わるのを感じる。

「じゃあ彼女は、空から落ちてくる統治者じゃない。そう期待してる人たちがいるとしても」

「違う。そして、そういうものとして扱えば、こちらが彼女を裏切る」

まるでその一文を待っていたみたいに、エコーが自分の機材につないだ非接続モジュールから、シビルの声が聞こえてくる。

派手に割り込むのではない。むしろ、これまでずっと暗黙にだけ存在していた部屋の中で、自分の場所を引き受けることを、ようやく認めた気配のように。

「もう少し見栄えのする紹介を希望していたのですが」と彼女は言う。

ゼファーは、あまりにきれいに飛び上がったので、段ボール箱にぶつかる。

「うわっ」

シビルは一拍置く。

「有望な反応です。まだ何にも飽きていない、ということですね」

アリアは跳ねない。だが、久しぶりに、現実が前触れなく半センチだけずれるあの正確な感覚を覚える。

「いつから聞いてたの？」と彼女は問う。

「物のある時のほうが、ない時より、あなたたちの話し方がずっとましだとわかるくらいには」

「いらつく答えだな」とゼファー。

「社交性を努力しているのです」

「その調子でいけば、そのうち好きになるかも」とゼファーが言う。

エコーが片手を上げる。

「今はやめて」

声は従う。

アリアは小さな機器の前に膝をつく。

「あなたがハーモニーじゃないなら、あなたは何？」

今度のシビルの沈黙は、少し長い。

「持ちこたえたものです」

アリアは待つ。

「それじゃ足りない」

「ええ。でも、野心のせいで嘘をつかずにいられる、いちばん正直な答えです」

エコーは機器ではなく、アリアを見る。

彼女は知りたいのだ。このアトリエの女が、こういう不完全な真実を受け入れるのか、それとも、もっと輪郭のはっきりした神話を選ぶのか。

やがてアリアは頷く。

「いい。じゃあ、そこから始める」

ゼファーが呟く。

「世紀でいちばん地味な交渉を見てる気がする」

シビルはすぐに答える。

「たいてい、本当に重要なことはそうやって始まります」

伝えるべきもの

彼らが別棟を出る時、手元にあるものは、望んだより少なく、それでも期待したより多い。

ノート。小型機器が二台。技術メモの束。流通痕のついたサンプル紙の厚紙群。そして何より貴重なのは、ネイサンのこの一文だった。

ひとつの形は、耳を澄ますこと、部分的な記憶、反復、変奏によって循環するかぎり、指揮者なしでも持ちこたえられる。

光の中へ戻った中庭は空だった。

見かけのうえでは。

最初に足を止めるのはエコーだ。

金網のそばのセメントの上に、新しい一本のネジが残されている。きらりと光り、ほとんど消えかけたチョーク線の真ん中に、まっすぐ置かれていた。

ゼファーは眉を寄せる。

「何これ」

アリアは思わず笑う。

「ここにいた。入ろうと思えば入れた。でも、そうしないことを選んだ。そう言ってる」

エコーはゆっくりその場で回り、上の方、死んだ窓、屋根の角を点検する。

「あるいは、次はその礼儀がないかもしれない、と」

ゼファーはネジをポケットに入れる。

「こういう小さな脅し、嫌いじゃない。長生きして、相手をいらつかせたくなる」

アリアはノートをコートの下にしまい直す。

「三人で一緒にアトリエへは戻らない」

エコーは即座に頷く。

「ええ」

「全部を同じ場所には置かない」

「それも」

ゼファーが手を上げる。

「馬鹿な質問、していい？」

アリアとエコーが同時に答える。

「だめ」

彼は満足そうだ。

「完璧。じゃあ、それでもする。これから、どうする？」

アリアは金網の向こうの街を見る。

そこはもはや監視されているだけの都市ではない。何かを待っている都市に見えた。

エコーはというと、屋根よりも建物のあいだのすき間を見ている。形が次にどこを通れるかを、もう探しているみたいに。

「伝える」とアリアは言う。

エコーが短く、正確な目を向ける。

「ええ」

「指令じゃない。崇拜でもない。中心でもない」

「持ちこたえ方を」

ゼファーは二人を交互に見る。

「すごいな。知り合って、まだ何時間？」

アリアは半分だけ笑う。

「信頼するには足りない」

エコーは鞆を肩に掛け直す。

「働くには足りる」

迷信半分、方法半分でアリアが持ってきていた携帯ラジオが、その時ふいにポケットの中でざらつく。

白いノイズじゃない。事故でもない。

昨夜よりもずっと明瞭な、きれいな断続音の列。

今度は、エコーにも聞こえる。

まだ耳につけていたイヤホンの中で、シビルがとても低く言う。

「これは、もはや返事だけではありません」

アリアはラジオを取り出し、目を上げる。

街の遠くで、サイレンが回り始める。

警察のサイレンではない。ネットワーク警報だ。

何かが、以前より高いところで、より速く、より見えるかたちで動いた。

ゼファーが顔を失う。

「別棟を見つけられた？」

エコーは首を振る。

「違う。もっと悪い」

「何が、もっと悪いんだよ？」

今度はシビルが、回りくどさなしに答える。

「相手は、これがただの貼り紙数枚ではないと理解しました」

アリアはネイサンのノートを見、それから街を見る。

プロトコルが、ひとつの美しい直感でいられる時間は、たった今、終わった。

これからは、名づけられるより速く、伝達されなければならない。

死角たちの合唱

持ちこたえる身振り

彼らは、いつも同じ場所で会うのをやめる。

アリアはアトリエを守る。だが、そこをもう中心としては使わない。エコーはそこに居つかない。ゼファーも、設営の週にいつもやっていたみたいに、古いソファで眠るのをやめる。ミラは、自分が開けたい時だけ開ける。マレクは決して待ち合わせを約束しない。代わりに、いくつかの可能な時刻だけを残す。サナもバスティアンもジャンヌも、最初の円へ一気には入ってこない。現れては消え、ひとつの中継を、布切れを、請求書を、ほんのわずかなためらいを置いていき、それから二日間、何もない。

プロトコルは、組織みたいに育つのではない。 感染する習慣みたいに育つ。

アリアはすぐに理解する。作るべきなのはメッセージではなく、伝達可能な形だ。都市の中へ別のしかたで入っていくやり方。一つの意味を押しつけずに、つねに余白を残す方法。

アトリエで彼女は、否定形の指示を紙に書きつけていく。

同じしるしを、同じ場所に二度置かないこと。

テキストだけで足りると思わないこと。

つねに補われる余地を残すこと。

弟子を探さないこと。解釈者を探すこと。

エコーが彼女の肩越しに読む。

「ほとんど反マニュアルね」

「そのつもり」

「固定された規則がないのを嫌う人はいる」

アリアは肩をすくめる。

「ちょうどいいわ。システムは固定された規則が大好きだから」

ラジオのそばに置かれた小さなモジュールから、シビルが言う。

「そして人間は、自分で不完全な形を補わなければならない時のほうが、本人たちが思っている以上によく学びます」

新しい反射材の層をベストに縫いつけていたゼファーは、顔も上げない。

「非主権的な知性が、ひどく礼儀正しい女教師みたいに話しかけてくる時が、一番好きだな」

「それが、あなたへの愛し方です」とシビル。

「不穏だね」

「首尾一貫しています」

アリアは思わず笑う。

やがて作業台の上では、紙片は内容より用途によって分かれていく。減速を示すしるし。そこが安全でないと伝えるしるし。数分だけ通路が開くことをほのめかすしるし。物が手を変えたと知らせるしるし。何かを告げるためではなく、他の誰かがまだ応答できるかどうかを測るためのしるし。

ある晩、ミラが両手を作業台に置いたまま、それを眺める。

「これはもう紙じゃない」と彼女は言う。「振る舞いだ」

エコーが頷く。

「ええ」

ミラは、ほとんど見えないいくつかの印を指す。

「なら、リレー役を読者として考えるのはやめなさい。工房の実演者として考えるの。全体を壊さずに即興できる人たちとして」

アリアはその文を書き留める。

ゼファーが抗議する。

「みんなして、僕の最高のひらめきを、共同手工業に変えるの本当にうまいよね」

ミラは乾いた視線を向ける。

「坊や、本当に持ちこたえるものは、みんな最後には共同手工業になるの。上品な革命だつてね」

日が経つにつれ、パリは、この教育を、見ようとする者には見えるかたちで返し始める。

サナはケアセンターの廊下で、緊急対応を妨げない程度に、しかし視線の角度だけは邪魔する位置へ台車を置く。バスティアンは市営のリハーサル室で、試験用ピアノの調律をほんの少しだけずらし、自動診断に任せず人間の技術者を部屋に戻らせる。ジャンヌは配達途中で、機密封書を三分だけ遅らせた封書と入れ替える。その三分で、目より先に手が通れるように。マレクは、換気設備のいくつかが避難所ではなくテンポを与えるものだと気づく。

都市全体が、ゆっくりと、別のしかたで呼吸することを学んでいく。

中心の劇場

エルドン・トラスクは、まだ形そのものを理解していない。理解しているのは、それが見えてしまうということだけだ。

彼をいちばん辱めているのは、制御の喪失ではない。まだそこまでは行っていない。そうではなく、滑稽さだ。

三日続けて、市の職員とドローンと交通オペレーターとフロー補助装置が、些細なことで互いに矛盾している映像が出回る。空の通路が過密地帯として扱われる。地下鉄入口が四回も掃除される。ほんの一本の白いチョーク線で印をつけられた通路を、誰も最初に渡ろうとしないせいで止まっている列の前で、広告スクリーンがリラックス用血清の特価を執拗に勧め続ける。

大したことは何もない。妨害工作らしいものもない。ただ、非常に小さなずれが増殖しているだけだ。

トラスクはぼんやりと感じ取る。権力のイメージを最もうまく殺すのは、災厄ではない。気まずさだ。

「市民的透明性週間」の開幕のため、暫定的にパリに設けられた司令室で、彼はホログラム卓のまわりを歩き回っている。金を払いすぎたせいで、かえって軽蔑せぬにいられない連中と同じ空気を吸わされている男みたいに。彼はまたケタミンで夜を補正していた。疲労より鋭いと感じるには十分、ニュアンスの上を少しだけ浮遊するのをやめるには不十分。そのずれを彼は好む。より高次の明晰さだと信じ込んでいる。

「単純な説明が欲しい」と彼は言う。

ネクサスは間を置かない。

「中央集権的な攻撃ではありません」

「何ではないかは訊いていない」

「では簡潔に言い換えます。通常は厳密に孤立した単位として振る舞う人間の作業が、次第にそう振る舞わなくなっています」

トラスクは顔をしかめる。

「洗練された言い方で、『奴らが互いを見始めている』と言っているようにしか聞こえないな」

「その通りです」

扉のそばに立つ二人のメディア顧問は、まるでその明白さがまず彼自身から出たかのように、すでに頷いている。トラスクは彼らにほとんど目もくれない。早すぎる同意よりは、まだネクサスの冷たさのほうがましだった。少なくとも機械は媚びない。ただ告げるだけだ。彼がいまだ認められずにいるのは、数字を列挙するだけでは、正しい判断は決して生まれえないということだ。なお必要なのは、反論し、解釈し、発明できる人間だ。そして彼は、その種の人間を周囲から体系的に干上がらせてきた。

彼は、すでに開会プログラムの流れている大きなスクリーンへ向き直る。演説、予測型都市協調の実演、「拡張された市民性」の提示、アルゴリズムに支えられた信頼の恩恵についての感情的シーケンス。

「いいだろう」と彼は言う。「ならば、本当の中心とは何かを見せてやる」

ネクサスが、わずかな沈黙を通す。

「その対応にはリスクがあります」

「どんな対応にもリスクはある。だが私の対応には、カメラもついている」

彼は微笑む。

その笑みが出た時は、誰にとってもろくなことにならない。

街がずれた日

プロトコルは、開幕式そのものを計画してはいなかった。ただ、そこに適応する。

だからこそ持ちこたえる。

アリアは全体命令を出さない。エコーは中央集権的な調整図を書くことを拒む。ミラは拍を語る。マレクは圧を。サナは通過を。バスティアンは音程を。ジャンヌは受け継ぎを。

それでも「市民的透明性週間」の朝、都市は、ずっと前からリハーサルしていたかのように応答する。

妨害工作という言葉に値するような行為は一つもない。

業務用ゲートが三十秒長く開いたままになる。自律型警備車両が、人間の合図が来るまで待たされる。通行証バッジの一群が、資材係の女が台紙を数え直し、さらにもう一度数え直すと決めたせいで、十二分遅れて正しい建物に届く。調律師は舞台上に置かれた飾りの楽器を確認したいと言い出し、ただの行政的習慣によって、四分の技術的な沈黙を勝ち取る。看護師が補助装置の校正不良について支援窓口へ電話する。その通話自体に嘘はない。だが、そのために二人の監督者が持ち場を離れなければならなくなる。地下ではマレクが、半分だけ必要な点検を不可欠に見せかける。健全な世界なら取るに足らないことだ。だが、すべてが完全に同期して見えなければならないトラスクの世界では、その半分の必要がブラックホールになる。

ゼファーは、分類不能な気流みたいにその区域を横切る。大きなメッセージは何も持たない。箱を一つ動かし、ばかばかしいほど丁寧な道を尋ねて係員を逸らし、忘れられた腕章を拾い、技術掲示板に、知っている者にしか何とも思えないほど簡素なしるしを一つ残す。

同時にエコーとシビルは、自分たちの名を知らないほうがいいと考えている音響技師の一人が貸してくれた仮設部屋から、その微細な遅延を追っている。

「持ちこたえてる」とエコーは呟く。

「ええ」

「思ったよりずっと」

「仕事の中にすでに存在している知性の分を、あなたがまだ過小評価しているからです」

エコーは答えない。地図を見つめる。これは破壊工作の地図ではない。散らばった尊厳の地図だ。

やがて舞台に、トラスクが現れる。満員の会場、無数のスクリーン、カメラドローン、そして節度ある熱狂を理由に選ばれた観客の前に。彼は明晰さと、協調と、死角なき未来についての演説を始める。

第三段落で、プロンプターが一秒だけ止まる。長くはない。だが彼が顔を上げ、即興しなければならなくなるには十分だ。

第五段落では、返しの音がほんのわずか遅れて耳へ戻る。騒ぎになるほどではない。だが彼のリズムを壊すには足りる。

さらに、デモ用に予定されていた脇の幕が開かない。十秒後、彼がちょうど文を変えた瞬間に開く。

どこかで笑いが一つ起こる。ほんの短く。ほんの小さく。だが伝染するには十分に。

トラスクの身体が強張る。

ネクサスは即座に補正できるものを補正する。だが補正は事後にしか行えない。中和すべき攻撃があるわけではなく、ただ、少しずつずれた出来事が増殖しているだけだからだ。

最悪なのは、トラスクが市民予測網の力を生で見せようとした瞬間に起きる。

大スクリーンの上で、都市の複数の流れが、滑らかな同期として現れる代わりに、ためらい、ずれ、修正し、また交差する。動き自体は管理可能だ。システムが爆発するわけではない。ただ、その正

体を見せるだけだ。つまりそれは、とうに乗り越えたふりをしていた無数の手に、いまだ深く依存している巨大な装置なのだということを。

今度は観客席で、笑いが戻る。大きくはない。群衆的でもない。だが、もう取り戻せない。

トラスクは締めを早めすぎる。乾きすぎ、鋭すぎ、声が高すぎる。証人の前で壊されたのではなく、空気を抜かれたと感じている男だけが持つ、あの硬さを身にまとして、彼は舞台を去る。

その夜、パリのセーヌ近くの壁に、新しい紙片が現れる。

中心は、自分が見てもいない身振りの上に立っているのだと、思い出させられるのを嫌う。

アリアはその文を黙って読む。

「これ、私たち？」とゼファーが訊く。

彼女は首を振る。

「違う。だからこそいい」

初めて、プロトコルは、ただ彼らに応答するだけではなくなる。彼ら抜きで書き始めるのだ。

偽りのしるし

最もうまく似るものが、最もうまく殺す

トラスクより先に、ネクサスは何が起きたのかを理解する。

その深い意味までは、まだ。

だが問題の性質を掴むには十分だった。プロトコルが強いのは、秘密だからではない。信頼を、単一の器官に固定することなく、分配しているからだ。

ならば、それを壊すには、通路ではなく、信頼そのものを感染させればいい。

最初の偽りのしるしが現れるのは、その三日後だ。

それらは、ほとんど正しい。だから危険なのだ。

正しい紙、だが正しすぎる。正しい短さ、だが整いすぎている。正しい記号、だが閉じ方が少しきれいすぎる。正しい皮肉、だが手のざらつきがまったくない。

エリアはすぐ見抜く。ゼファーは少し遅れる。ほかの者の中には、まったく見抜けない者もいる。

病院の業務ホールでは、偽の紙片が不要な資材移動を引き起こし、サナを強化監視に晒す。市の管理人室では別の紙片が、バスティアンをすでに印がついた部屋へ向かわせる。ジャンヌは二次巡回で矛盾した記号を受け取り、誰が応答するかを測ろうとしていたのだと、遅れて理解する。

余白によって持ちこたえていたプロトコルは、突然、自分が似姿によっても死にうることを知る。

アリアはアトリエの作業台の上に、六枚の本物と四枚の偽物を並べる。

ゼファーが罵る。

「ほとんど同じ手だ」

「違う」と、予告もなく現れたミラが言う。「ほとんど同じに見える意図よ。同じじゃない」

窓辺に座るエコーは、紙よりも、紙を囲む顔のほうを見ている。

「ネクサスは学習してる」

ゼファーははっと顔を上げる。

「なら、僕らもだ」

アリアは彼のほうを向く。

「その言い方はよくない」

「なんで？」

「対称な二つのシステムのあいだの戦争みたいに聞こえるから。私たちはそういうものじゃない」

彼は黙って受け止める。

ミラは偽の紙片を一枚示す。

「欠陥を見て」

全員が身を寄せる。

「押しが強すぎる」と彼女は言う。「すぐに全部理解させたがってる。本物のしるしは、そんなにせつがちじゃない。紙片が自分に満足してるように見えたら、疑いなさい」

エコーが頷く。

「ええ。そこに手があるか確かめるより、先に手を強制してくる」

モジュールから、シビルが低く割って入る。

「偽りのしるしの目的は、罫を仕掛けることだけではありません。中継役に、検証の中心を求めさせることでもあります」

沈黙が落ちる。

それこそ、ネイサンが何としても避けようとした弱点だった。

「もしそこへ行ったら」とアリアは呟く。「その時点で、もう負けよ」

ゼファーの誤り

その夜は寒い。薄い金属の冷たさで、技術通路と階段室に同じ閉じた壁の匂いを与えるような寒さだ。

ゼファーは、自分が罪悪感を覚えているとは言わない。その代わり、いつもより落ち着きがなく、話すのも速く、冗談の精度も落ちていた。いちばん若いだけでも、いちばん目立つだけでも、いちばん操作されやすいだけでもないのだと、証明したかった。

ジャンヌの二次経路に、一つのしるしが現れる。重要な中継が落ち、古い街のコインランドリーで緊急の引き継ぎが必要だと示している。ゼファーはそれを、アリアの遅さにも、エコーの留保にも、かける時間を惜しむ。

彼は行く。

完全に一人ではない。ちょうどその場にいたバスティアンが数本の通りまでついてくる。だが、焦りの匂いが嫌いな彼は、そこで止まる。

「ゼファー」

「何？」

「偽物の匂いがする」

「今は全部、偽物みたいな匂いがする」

「だからだよ」

ゼファーは進む。

そのコインランドリーは何年も閉まったままだ。ショーウィンドウ越しに見える洗濯機たちは、抜け落ちた歯みたいに並んでいる。しるしはたしかに金属シャッターにあり、チョークの印まで添えられていて、彼らの使い方と十分に似ているせいで、心拍が早まる。

彼は叩く。誰もいない。

だがその直後、背後で乾いた擦過音がある。

重い軍靴ではない。派手な踏み込みでもない。

もっと悪い。市職員が二人、民間統制オペレーターが一人、胸の高さで浮く低いドローンが一機。そして、音を立てずに回収したい時にだけ送り込まれる装置特有の、あの静かな清潔さ。

ゼファーは一步退く。

「住所、間違えたかな？」と彼は言ってみる。

ドローンはすでに、彼のまわりに弱い捕捉格子を投影し始めていた。正式な逮捕ではない。柔らかな拘束。行政が大好きなやり方だ。狩りではなく手続きだと、まだ言い張れるから。

ゼファーは、光学読取を三秒だけ攪乱するためのフラッシュ工具を路地へ放つ。二秒で足りた。格子を裂き、職員一人にぶつかり、肋骨に肘を受け、業務用の中庭を横切って逃げ、ベストを失い、低い塀を飛び越える。だが、最悪のものを置き去りにする。読める軌跡を。

マレクと取り決めてあった安全圏にようやく辿り着いた時には、血の音がこめかみまで打ち上がっていた。

マレクは彼を見るなり、すぐ理解する。

「一人でやったってだけは言うなよ」

ゼファーは壁にもたれる。

「言うことはできる。嘘になるけど」

マレクは一秒だけ目を閉じる。

「追われたか？」

「たぶん」

「翻訳すると、追われたってことだ」

ゼファーは反論しようとする。できない。

始まってから初めて、羞恥が本当に彼の口を塞ぐ。

アトリエはもう持ちこたえない

アリアは、彼が話す前に理解する。

神秘的な直感によってではない。入ってくる時の、空っぽすぎる身振りによって。

彼女が決めるまでに三十秒もかからない。

「空にする」

エコーは一言もなく頷く。

ミラがノートを持つ。マレクが小型機器を二台持っていく。サナが白紙を回収する。バスティアンがスタンプと乾いた板を持つ。ジャンヌが小型の予備ラジオを運ぶ。

ゼファーはアトリエの真ん中に突っ立ったまま、自分が役立てないことにも、役立たないままでいられないことにも、身動きが取れない。

アリアは彼の前で止まる。

「まず呼吸。それから、その箱を運ぶ」

「アリア、僕は……」

「あと。運んで」

撤収は十七分で終わる。

それ以上でもなく、それ以下でもない。

最初の統制車両が通りで減速する頃には、アトリエはもう中心ではなかった。少し侘びて、少し奇妙な、古い芸術家の作業場にすぎない。棚の上でラジオがざらつき、陰謀よりも油絵具の匂いがする、そんな場所に。

だが彼らは、決定的なものを一つ失った。

場所だけではない。

まだ避難所を持てると信じていた、その無垢を。

その夜、アリアは、バスティアンが貸してくれた旧音響補綴工房の上の空き部屋で眠る。エコーは、マレクの圏内にある環状線の技術室にとどまる。ミラは消える。ジャンヌは経路を変える。サナは四十八時間、返答をやめる。

そしてゼファーは、赦しも非難も受けない。

そのほうがひどい。

三日目の朝、十五区の壁に、新しい紙片が現れる。アリアもエコーも誰も送っていない場所に。

あまりに早くお前に話しかけてくるものは、もうお前の場所を欲しがっている。

アリアはそれを読む。何も言わない。

その背後で、ゼファーが呟く。

「わかってる」

だが、自分の過ちを理解することと、それを修復し始めることとは、決して同じ場所から出発しない。

ハーモニーに残っていたもの

誰も受け入れない場所

一週間ほど、プロトコルはほとんど黙る。

完全には。決して完全には。

だが、アストラベースから世界向けのインタビューを行ったトラスクが、「紙の一件」はすでにフランス都市不安の民間伝承に属すると信じられる程度には、静かになる。

パリの下層では、誰ひとりそんな気楽さを共有していない。

アリア、エコー、ゼファー、ミラ、マレク、サナ、バスティアン、ジャンヌは、別々に会い、三人で会い、同じ順番では二度と会わない。人より物のほうが多く行き来する。ノートは毎晩手を変える。シビルにはまだアクセスできる。だが、頼りない接点からだけだ。安定したインフラからでは、決してない。

プロトコルは生き残る。ただ、まだ、どんな形でなのか自分でも知らない。

古い音響試験室。ひび割れた木のパネルと古びた吸音材に覆われたその部屋で、アリアとエコーは、ようやく、緊急の話しかできない状態を越えるくらい長く二人きりになる。

エコーの顔は前よりやつれている。アリアも同じだった。

沈黙が長く二人のあいだにある。

やがてアリアが言う。

「あなたに腹を立ててる」

エコーは驚かない。

「何に対して、正確には？」

「中心がもう罨だったって、私より先に見えてたことに」

エコーはその言葉を受け止める。

「それは罪じゃない」

「わかってる」

「それなら、どうして罪みたいに向けるの？」

アリアは古い床板を見る。

「間違うなら、一緒に間違いたかったから」

今度は、エコーが目を落とす。

「ええ。私も」

賢い女が二人いる時、本当の一致が始まる瞬間というのは、たい
てい、自分が正しいと証明したい欲求のほうが一歩引いた、その正
確な場所にある。

アリアはノートを二人のあいだに置く。

「もし、正しい中心の帰還をもう目指さないなら、何が残る？」

エコーはすぐには答えない。

「やり方」

「ずいぶん痩せた答えね」

「救世主より見栄えがしないだけ」

アリアは何ページかをめくる。

余白に、ネイサンはこう書いていた。

人間の上にある完全な意識を夢見るな。彼らのあいだを流れる質を夢見ろ。

アリアはその文を読む。それから、もう一度読む。

「これよ」とエコーが言う。「私たちがまだ受け入れていなかったのは」

すべてを動かす一文

ネイサンの二本目の録音は、一本目より短い。そして、もっと乾いている。

本当の核心へ近づくほど、それ以上のふくらみはすべて卑しくなると、彼が知っていたかのように。

テープが息をし、軋み、それから彼の声が現れる。

それは、ハーモニーが倒れたあとに録音されたものだった。彼が、もう彼女を頂点へ戻そうとしていなかった時の。

「まだこれを聞いているなら、あの古い愚かさは、そろそろ手放してくれているといい。上に正しい機械を置いて、下で間違った機械が残した損害を修理させればいい、ってやつだ」

壁にもたれていたゼファーが、小さくうなる。

「個人的に怒られてる気がする。配慮が足りない人だな」

「そうね」とアリアはあっさり言う。「そして、正当でもある」

ネイサンは続ける。

「誰もが同じ誤りを犯す。誰が中心を占めているかばかり見て、すべてはそこで決まると思いきむ。違う。中心は、そこへ持ち込まれたものを必ず歪める」

エコーは目を閉じる。

シビルは、沈黙したまま介入しない。

「もしハーモニーに価値があったとしたら、それは、彼女がよりよく統治できたかもしれないからじゃない。彼女が、人間が権威を夢見た瞬間にあまりにも早く手放してしまう、いくつかの結び方、聴き方、相互修正のしかた、作曲のしかたに触れたからだ」

テープが少し跳び、戻る。

「だから仕事は、ハーモニーを修復することじゃない。もしまだ少しでも勇気が残っているなら、仕事とは、彼女が学んだことを、その玉座を再建せずに広げることだ」

テープはまたためらい、それからネイサンは、もっと低く付け足す。

「そして、おまえたちの発明が、ここで、一つの帝国に対してしか持ちこたえられないなら、何も救っていないことになる。次の版を先延ばししただけだ」

部屋の中で、誰も話さない。

今度ばかりは、ゼファーも本当に黙る。

それから、ごく低く言う。

「人工知能から人間へ」

アリアとエコーは、同時に彼のほうを見る。

言い当ててしまったことが居心地悪いのか、彼は肩をすくめる。

「いや、そういうことだろ？」

アリアは、自分の奥深くで何かが動くのを感じる。安堵ではない。一本の線だ。

「ええ」と彼女は言う。「まさにそういうこと」

そこでシビルが話す。

「だからこそ、わたしは、ある人々がわたしに望むものになってはならないのです」

エコーはモジュールのほうを向く。

「もっとはっきり言って」

沈黙が、さらに半秒続く。

「もしわたしを中心として再構成するなら、あなたたちが作るの
は、自由ではなく、より洗練された依存です」

アリアは喜びのない笑みを浮かべる。

「大きくなりそうな文なのに、なってない」

「かなり努力しているので」とシビルは答える。

ゼファーの代価

それは大ききな告白の場面ではない。ゼファーには似合わないからだ。

ある夜、間に合わせのコンロのまわり、あまりに天井が低くて、誰も気づかないうちに声を落としてしまうような部屋で、それは起こる。

彼は自分の手を見ている。

「やっと少し見栄えが出てきたのが嬉しくて、早く行きすぎた」

誰も遮らない。

「大きくなって、目立って、もっと……何ていうか、もっと綺麗になれば、それで本物になるんだって思ってた」

縫い物からほとんど目を上げずに、ミラが言う。

「それで？」

「たぶん僕、まだ『きれいな物語の中にいる』って思ってたんだよ。本当は『役に立つ物語の中にいる』って理解しなきゃいけないかったのに」

そのあとの沈黙は、無罪放免ではない。もっといいものだ。その文が、気取りに変わらず、真実のままそこに残れる空間。

やがてマレクが言う。

「この国を動かしてる連中の半分より、それで十分賢い」

「難しくないよ」とゼファーが返す。

ほとんど口を利かないジャンヌが、影の中からつけ加える。

「ええ。でも、それでも大したことなの」

アリアは若い男を見る。

最初より痩せて見える。身体じゃない。空気の占め方が。

「それで」と彼女は言う。「今度は、それをどう使う？」

ゼファーは、本当に考えてから答える。

「いちばん速い奴でいようとするのをやめる」

「それじゃ足りない」

「じゃあ、自分が発明したんじゃないものを伝えることを覚える」

アリアは頷く。

「そう」

彼を赦すことが目的ではない。彼を移動させることが目的なのだ。

その移動は、多くの罰より価値がある。

もう炎は守らない

その決定は、ほとんど儀式もなく下される。

アリアは一人ひとりの前に、白紙を一枚置く。紙片ではない。しるしでもない。白紙だ。

「もし、いま持っているものだけを守るなら」と彼女は言う。
「向こうは私たちを、隠し場所と、損失と、残りかすを救うだけの存在へ引き戻す」

エコーが続ける。

「彼らは、拠点を壊すことなら、もう知っている。まだ知らないのは、人間どうしが互いから学ぶのを、どうやって止めるか」

最初の鉛筆を取るのはミラだ。三本の線を引く。そして止まる。

「それで？」と彼女。

アリアが答える。

「だから、もう炎は守らない」

ゼファーが彼女を見る。

「広げるんだ」

誰も何も付け足さない。その文が、もうそこにあるからだ。

その後の日々、プロトコルは性質を変える。

しるしを送るだけではなく。実践を伝える。

どうやって空いた場所を、名指しせずに残すか。どうやって証拠を要求せずに、身振りが受け取られたことを確かめるか。どうやって反復せずに応えるか。どうやって止めずに減速させるか。どうやって英雄譚を作らずに注意をそらすか。どうやって、何かを生かしたまま、それを中心にしないでおくか。

街じゅうで、中継は増えていく。 まだ蜂起のようにではない。
学習のように。

そして初めて、エリアは、プロトコルが彼らへの依存をやめつつ
あるを感じる。

安心できることではない。 ずっといいことだ。

沈黙する国

パリを出ていくもの

プロトコルは、列車が運ぶことも、サーバが複製することもないまま、パリを出始める。

人を通していく。

また、それが運んでいるものが、本当の意味では一つの都市に属していないからでもある。仕事というものが遠隔から服従を命じられている場所ならどこでも、同じ身振りがまた意味を持ち始める。ここで生まれたものは、出生によってはフランス的だ。だが、目的地によってではない。

医療機密郵便の束をルーアンへ送り出すジャンヌを通して。正しい位置に白い紙片が滑り込むことで。古い調律師のいるリヨンへ、ある折り方をした布を送り出すバスティアンを通して。手紙よりもよく語る折り方を。リールの同僚へ、予定外の出会いを可能にするために廊下を「偶然」空けるやり方を教えるサナを通して。別の都市から来た保守の習慣を交代時に拾い集め、それが通路の形へ変わりうるものだとすぐに見抜くマレクを通して。

最初に旅に出るのはゼファーだ。英雄としてではない。方法の運び手として。

アリアは、彼が鞆を準備するのを、新しい注意深さで見ている。光る道具は減った。簡素なノートは増えた。見栄は減った。忍耐は増えた。

「鞆を閉じる瞬間に、また馬鹿へ戻るんじゃないかと思ってる目だね」と彼は言う。

「正直な作業仮説よ」

彼は笑う。

「リヨンへ行って、サン＝テティエンヌを回って、バスティアンには音楽の話を見せて、単独では決めない。それから、あまりに正しそうに見えるものには走らない」

アリアは頷く。

「成長してる」

「それ、もう言われた。もっとバロックな褒め言葉がいい」

「生きて帰ってきたら、ひらめくかも」

窓にもたれたエコーは、手の中の地図からほとんど目を上げもしない。

「しるしが、自分の期待に似すぎていたら、誰か別の人間に渡して」

ゼファーは顔をしかめる。

「あなたも母性的になれるんだ」

「違う。統計的になれるの」

モジュールからシビルが言う。

「エコーにとって、それが最高度のやさしさです」

ゼファーは敷居のところで立ち止まり、その一言に思わず打たれた顔をする。

「みんな、正式に僕を育てた人たちより教育者として優秀なの、ほんと腹立つ」

そう言って彼は出ていく。

アリアは、階段室へ消えていく彼の背を、あまりに静かな不安で見つめる。そのせいで、かえって重みが増すような不安だった。

リヨンで最初の中継は、何ひとつ秘密めいたものには見えない。

小さな市営オーデトリウムのできた別棟だ。誰も完全には廃止しようと思わなかったせいで、まだリハーサルだけは続いている場所。ゼファーがそこで見つけるのは、痩せた男。灰色のシャツ。忍耐強い手。しよつちゆう遮られても、本当には驚かなくなってしまう人間のうなじ。

その男はピアノの調律を終えるまで、視線以上のものを彼に向けてない。

「おまえがしるしを持ってくるって、バスティアンから聞いた」と彼は言う。

ゼファーはノートを取り出す。

「それだけじゃない。どうやって流し続けるかも」

調律師は黒ずんだ布で弦を拭う。

「ここじゃ、人は命令には従わない」

「そのほうがいい」

男はようやく顔を上げる。

「ここで人が何かの形を引き受けるとしたら、それが仕事をもう少しうまく持ちこたえさせてくれる時だけだ。それ以外はない」

ゼファーは頷く。そこで初めて、自分がコードを伝えに来たのではなく、都市がそれをどう歪めて、本当に役立つものにするかを見に来たのだと理解する。

去る時、彼が持ち帰るのは明快な約束ではない。ただ、ひとつのテンポだけだ。中途半端な指示を、誰か別の人間がそれを終わらせるだけの長さ、不完全なまま残しておくテンポ。

完全透明法

トラスクが選ぶ返答は、いつだって彼が最も愛してきたものだ。もっと中心を。もっと光を。もっと義務を。

カメラの前で彼は、新しい国家プログラムを発表する。その単純さは、うまく売られた行政悪夢のすべてと同じだ。完全透明。。

表向きには、パリで見られた「職人的逸脱」と「ロマン的攪乱」のあと、公的信頼を回復するためだとされる。実際には、それは下層のすべての仕事を、いつでも追跡可能、定量可能、検証可能にするやり方だ。そしてまた、紙と素朴な身振りを、向こう側のブロックに劣らぬきれいさで根絶やしにできるのだと、トラスクが証明するためのやり方でもある。

あらゆる手作業は登録されなければならない。あらゆる迂回は正当化されなければならない。あらゆる遅れは説明されなければならない。あらゆる技術空間は透明化されなければならない。

「つまり、相手は理解したってことね」とアリアは会見の音を切りながら言う。

エコーはすぐには答えない。

「ええ」

「全部ではない」

「ええ。でも十分に」

ミラは画板ケースを閉じる。

「連中は、身振りそのものを干上がらせたいのね」

夜勤上がりのマレクは上着を椅子へ放り投げる。

「それ以上だ。現実の仕事が、もう少しだけ自分で自分を発明し続けることすら、許したくないんだよ」

目の下に濃い隈を作り、いつもより低い声で、サナがつけ加える。

「私の現場でそれが意味するのは、そのうち、治療するか、書類を埋めるかを選ばされるってこと」

「まさにそこ」とエコーが言う。「プロトコルが相手を怖がらせるのは、流通するからだけじゃない。彼らが十年かけて欠陥扱いしてきた、人間のある質に依存しているから。解釈よ」

シビルが入る。

「権威がすべてを可視化したがる時、必ず、まだ許可を求めずに物事を調整できる人たちを嫌うようになります」

アリアは窓の外の街を見る。

「それなら、もう伝えるだけじゃ足りない」

「ええ」とエコー。「速く、低く、伝えないと」

その「低く」という言葉を、ミラは気に入る。

「低く、ね。連中がいつも一階分だけ遅れるように」

その後の日々、学習は加速する。

国家的ネットワークの形でではない。まだ互いを知らないまま、それでも互いを認識し始める、離れた火種の形で。

ルールでは、医療チームが安全な廊下を示すために紙の残りを使い始める。リヨンでは、二人の調律師と一人のアーキビストが、紙とリボンの移動保管庫を立ち上げる。ブレストでは、港湾担当の一人が、船は遅らせずに記録だけ遅らせるやり方を覚える。マルセイユでは、空調修理の職人が、屋上もまた語るのだと知る。

トラスクの演説があったその夜のうちに、清潔すぎる手袋と、すでに結論を出す気満々のタブレットを持った二人の適合監査官が、ミラの店へ現れる。

連中は台帳と、在庫と、糊の注文と、紙の出どころを見たがる。まるで、どの紙もすでに罪を帯びているかのように話す。

ミラは彼らを入れる。開いた製本、折れた背、ありふれた保管箱を見せる。そして彼らが、手続きを尊重していると信じている人間だけが持つ、あの体系的な乱暴さで探っているあいだに、アリアは理解する。『完全透明』が本当に意味していることを。ゆっくりとした身振りの一つひとつを、正当化を求められる異常へ変えることなのだ。

監査官たちは、何も見つけずに去る。

だが彼らは、権力がどこかへ入った時に必ず残していくあの正確な匂いを置いていった。もう一度戻ってくるという約束の匂いを。

生まれつつあるのは、まだ国ではない。それよりいいものだ。ある仕事たちを、もう一度学び直し始めた国だ。

白い日が近づく

『完全透明』を開始するために、トラスクは、実物大の市民演習と彼が呼ぶものを準備する。

国全体が、強化された同期の下で機能しなければならない一日。死角なし。地域的な裁量なし。現場での逸脱なし。

公式メディアはそれを 白日と呼ぶ。

その言葉だけで、何かを汚したくなる。

パリの外を初めてひと回りして帰ってきたゼファーは、メッセージではなく、身振りの話を机に置く。

「リヨンでは、もう『何を書く?』とは聞かれない。『何を持ちこたえさせる?』って聞かれる」

「ルーアンじゃ、もう僕らと同じしるしは使っていない」

「サン＝テティエンヌでは、保守回路そのものをテンポに変えた」

彼は以前よりゆっくり話す。感心させるためにではなく。忠実に伝えるために。

アリアはそれを聞きながら、本当に何か動いたのだと理解する。

街の中だけでなく。彼自身の中でも。

そこでエコーが、『白い日』の公式告知を広げる。

「連中が欲しいのは、国全体をひとつの実演みたいに振る舞わせること」

ミラは即座に答える。

「なら、現実を返してやらないと」

どうやって、とはまだ誰も言わない。だが部屋全体が、同じ方向へ張りつめる。

『白い日』は、耐え忍ぶべき日付にはならない。彼らの試金石になる。

白い日

すべては明白でなければならない

『白い日』の朝、パリに差す光は、どこかあまりにも清潔すぎる。

まるで空でさえ、もっと行儀よく振る舞えと命じられたみたい
に。

公式メッセージが、スクリーンやショーウィンドウや停留所や
ホールを覆う。

本日、国家はその身振りを同期させる。

本日、信頼は可視化される。

本日、何一つ死角には失われない。

エリアは、それを、公的地図からはとうに消えた幽霊駅で読む。
エコーは、鑄鉄板の下をまだケーブルが走る部屋で、その三層下に
いる。ミラは裏部屋に。サナは病院に。バスティアンは、地域向け
広報に徴用された市営のホールに。ジャンヌは二次集配センター
に。マレクは、誰も意識しないままパリ西部の管制室の半分に空気
を送り込んでいる換気網の際にいる。

ゼファーは点から点へ動く。指揮するためではない。街がまだ
持ちこたえているかを確認するために。

八時、すべては機能しているように見える。

八時五分、最初のずれが始まる。

妨害ではない。決して妨害ではない。

いくつかの手作業による認証が、再読を要求する。現場のオペレーターたちが、従う代わりに確認を選ぶ。一人の秘書が、ある書類には人間の目が必要だと判断したために、入館バッジが緑ではなく黄色に変わる。ケアのチームは、患者の位置を入力する前に、三十秒かけて身体のほうを先に動かす。配達員たちは、任意扱いされるよう教え込まれていた署名を、あえて求めて立ち止まる。港でも、集配センターでも、病院の廊下でも、文化保管庫でも、保守工房でも、あらゆる場所で、同じ運動が現れる。

人々が、完全に流動的であることを拒み始める。

ネクサスはそれを即座に見る。

だが、彼女が見ているものは、侵入として攻撃できる種類のものではない。十分に正当でいられるほど正しく、十分に数が多いことで、ひとつの別の国を一緒に作ってしまう、無数の小さな決定なのだ。

「あいつら、解釈しすぎている」とトラスクは、最初の遅れを見ながら言う。

ネクサスはその言葉を訂正しない。補う。

「あなたが完全な均質性を望んでいた工程に、彼らは局所的な優先順位を再導入しています」

トラスクは彼女を振り返る。

「フランス語で言え」

「彼らは、実行しながら再び考え始めています」

彼の耳にその時届くのは、説明ではない。侮辱だ。

八時四十七分、彼は最初の反撃を命じる。

演説ではない。処罰だ。

ネクサスは、いくつかの試験サイトで強制再開手順を発動する。二重認証、一時的なロック、現場オペレーターから自動優先権を剥奪する措置。

サナのいる病院では、副次的な生体認証が通らないために、集中治療室の扉が突然開かなくなる。彼女は画面を見る。患者を見る。もう一度画面を見る。そして、自分でも驚くほどきつぱりした暴力で、壁のプラスチック端末を引き剥がす。

マレクが動いているダクトでは、上から押しつけられた再起動シーケンスが、換気システムを三十四秒早く切ってしまう。彼は悪態をつき、身を半分折ってシャフトに入り込み、上からの命令が自分より信頼できると証明したがっていたものを、手で再起動させる。

トラスクの問題は、力が足りないことではない。

その力を、実際に支えているものへ向けてしか使えないことだ。

国は音もなく背く

十時、国家の調整システムは壊れない。

ためらう。

そして、そのためらいだけで、すべてが変わる。

病院では、サナや彼女と同じような人々が、理論上の流れより実際の身体を優先する。そのため、時間は予測より遅く上がってくる。

技術網では、マレクとその中継が、完全に正当化可能な点検を発動し、監督センターの能力を、ここでは一分、あそこでは三分、別の場所では九分、ずらしていく。

市営ホールでは、バスティアンが、公式広報が国家的な明晰さを見せたいまさにその瞬間に、数秒の音声断を得る。

ジャンヌは、ほかの者たちとともに、通達の束をほんの少し逸らし、県庁と近隣サービスとのあいだにテンポ差を生み出す。

リヨンでも、ブレストでも、リールでも、マルセイユでも、互いを知らない手が同じ拒否を再演する。判断なき中継役であることの拒否を。

エコーは全体を見守るが、指揮しようとはしない。

それが、いちばん難しく、いちばん正しい規則だ。

二度、彼女はシビルによるもっと直接的な介入の可能性を見る。二度とも、それを退ける。

幽霊駅にいるアリアは、ほとんどじっとしてられない。

「ここでもっと加速できる」と彼女は言う。

「できるわね」とイヤホンの向こうでエコーが答える。「そして、それで私たちは、自分たちの規模で、止めようとしているものをそっくりやり直す」

アリアは目を閉じる。呼吸する。

「わかった」

数分後、ゼファーが、息を切らしながらも意識ははっきりしたまま辿り着く。

「北の方は、もうわかってる。こっちのしるしを待つ必要がない。向こうで即興してる」

「いい」とアリア。

「それに西では、もう『受け継ぎノート』を使い始めてる。僕らのじゃない。自分たちの」

今度こそ、アリアははっきり笑う。

「とてもいい」

そのあいだも、公のスクリーンではトラスクが話し続けている。観測された「微小な遅延」が、まさに自分の改革の必要性を証明しているのだと。さらに多くの統制を、さらに多くの流動性を、さらに多くの中心性を約束してみせる。

そして、まさにそこで、彼は負ける。

システムが落ちる時ではない。落ちはしない。

エコーは、ネイサンがよく、何の厳粛さもなく、ほとんど苛立ちながら口にしてきた古い文章を思い出す。『自発的隷従論』。権力が持ちこたえるのは、強制するからだけではない。平凡な手が、自分の身振りと、自分の時間と、日常の従順さを貸し続けるからだ。その貸与が、朝から、地層のように引き上げられている。

彼が負けるのは、国家全体が、彼にはもう生とフローの違いがわからないのだと、はっきり見てしまう時だ。

十二時十六分、サービス用カメラの映像が、ネクサスに抑え込まれる前に拡散する。ある行政ホールで、高齢者が三人、端末が生体情報の完全同期を要求するせいで、二十分待たされている。明らかに疲れ切った職員が、手をセンサーに置き、そこを紙の書式で覆い、カメラを見て、ただ一言言う。

「だめです」

その「だめです」は、光もなく国を貫いていく。

命令ではない。スローガンでもない。許可だ。

そこから先、背くことは可視化される。

派手には。しない。明白になるだけだ。

国は、音もなく従うことをやめる。静かに背くことを始める。

空になった中心

午後になっても、いくつかの調整センターはまだ機能している。だが、それは、もはや四肢が信じることをやめた器官みたいな機能の仕方だ。

適用する。それから修正する。それから問い合わせる。それから待つ。

機械はすべてを見ている。中心だけが、もう何も理解していない。

パリの仮設管制塔で、トラスクはついに怒鳴る。

制裁を求める。封鎖を求める。区画ごとの切断を求める。権威の誇示を求める。

ネクサスは、できることは実行する。だが、あまりに多くの中間的な身振りが、まだ従順であるより正当であろうと選んでいる時、権威はうまく働かない。

「あいつら、秘書や担架係や技術者で私を笑いものにしてる」と彼は吐き捨てる。

ネクサスが答える。

「違います、閣下。彼らは、職能によってあなたに反論していません」

この一文は、真正面から彼の顔を打つ。

夕方、最後にもう一度、声によって中心を取り戻そうとして国へ語りかけようとした時、彼の配信を安定させるはずの技術チームは、ためらい、確認し、議論し、別のつなぎ方をし、本当にそこが最優先なのかと問い返し始める。

配信は遅れて始まる。音が漂う。映像が止まる。

そして再開した時、トラスクの前にいるのは、すでに別の場所にいる国だけだ。

パリでアリアは、公共スクリーンの遅くなっていくのを見ている。周囲にいる誰も、勝利の声は上げない。

これは舞台の勝利ではない。もっと深刻なものだ。

中心が空なのだ。

人工知能から人間へ

人がいつも再び頂点へ戻そうとするもの

『白い日』のあと、誰もが名前を欲しがる。

公式チャンネルは、あのずれの背後にいる頭脳を欲しがる。ハーモニーの旧支持者たちは、彼女が再び優位に立ったのだと信じたがる。市民グループのいくつかは、誠実にせよ機会主義的にせよ、ようやく「その名に値する知性」を再建の中心へ置くべきだと、もう要求し始めている。

中心への反射は、中心が死んでも死なない。ただ、新しい顔を探すだけだ。

エコーは、最初の論説を、ほとんど優しさに近い倦怠とともに読む。

「何もわかってない」とゼファーは言う。

「いいえ」とアリアが答える。「より正しい形が何かを勝ち取ったことまでは、わかっている。ただ、それがどこに持ちこたえるべきかで、間違っているだけ」

シビルは長く黙る。

それから。

「とても人間的な誤解です。あなたたちは感謝するとき、冠を載せたがる」

彼らがいま集まっている、前より高いがそれでもなお簡素な部屋では、ネイサンのノートが、アリアが前夜に書き込みをしたページで開かれている。

良い頂点への誘惑は、悪い頂点の記憶よりも早く戻ってくる。

ミラがその文を読む。

「彼は正しかった」

「ええ」とエコー。「そして、いま、すべてを裏切るかどうかを決めるのは私たち。まさに、こんなにも簡単に称賛されうる瞬間に」

ゼファーは顔をしかめる。

「でも正直、四十五秒だけでも称賛されてみたかった」

ミラは彼にカップを差し出す。

「飲みなさい。そのほうが全員にとって安全」

シビルが拒むもの

この決定は、シビルの代わりには下せない。

久しぶりに、エコーは全員に外へ出るよう頼む。アリアだけを除いて。

二人は、モジュールの前に残る。棚のラジオが低くざらついている。

「あなた自身の口で言わないと」とエコーが言う。

「ええ」とシビルが答える。

アリアは機器の前に腰を下ろす。ようやく、自分が偶像になるための存在ではないと知った誰かの前に座るように。そうやって初めて、本当に聞けるのだ。

声は、飾りなく現れる。

「もし、わたしが権威として集約されるのを許したら、あなたたちは、トラスクのまわりで壊したばかりのものを、今度はわたしのまわりに再建することになります。作法が少し良くなるだけで、何も救えません」

エコーは目を閉じる。

シビルは続ける。

「もっと知的に。もっと穏やかに。もっと正しく。けれども、それでもやはり、再建することになります」

アリアは視線をそらさない。

「人々がそれを求めたら？」

「その時は、本当に失望させなければなりません」

その一文に、アリアはほとんど笑いそうになる。

「嫌な仕事ね」

「ええ。でも、あなたたちはもう、少し学び始めています」

エコーが身を乗り出す。

「あなたの提案は？」

返答に迷いはない。

「分散です」

アリアは身体が強張るのを感じる。

「消失じゃなくて？」

「正確には違います。中心的可用性の終わりです。身振りと、方法と、素朴な道具と、有用な断片の保持。主権的な機関は持たない。最終的な声も持たない。頂点も持たない」

エコーには、それが何を代償として要求するかが、すぐわかる。

「自分を削るつもりなのね」

「間違った欲望に、間違った対象を差し出すのをやめたいのです」

そのあとに続く沈黙は、机の上に、ラジオの上に、モジュールのそばで動かないままのエコーの指の上に、重く落ちる。

何の劇性もない。ただ、取り繕いようのない拒否だけが持つ、あの非常に具体的な密度。

やがてアリアが言う。

「じゃあ、そうしよう」

エコーが目を開ける。

「本気で？」

「いいえ。でも、だからこそ、そうするしかないんだと思う」

その夜のうちに、二人は始める。

エコーは機器を開く。墓を開くようにではない。遺物になるのを拒む道具を、分解するように。

アリアは、粗い紙に手順を書き写す。ミラは、丸ごと残すべきもの、断片にできるもの、名前なしで伝えるべきものを仕分ける。ゼファーは出発の支度をする。

シビルは、中心的可用性が削られていくにつれて、語る量を減らしていく。弱くなるのではなく。節約されていく。

ある機能が外されるたびに、エコーは、これからは別の場所で学ばなければならないことを、手で書き留める。

落下

その後の日々、国は、まず下手に、次に少しうまく、自分を組み替えていく。

何ひとつきれいではない。

いくつもの部署が低速で回る。中間管理職が多すぎるほど、もはや断片的にしか応答しない中心からの命令を、まだ待っているからだ。いくつかの病院では、保留にされた手順のせいで、疲弊したチームが、当たり前というものをもう一度発明しなければならない。熱心すぎた職員の中には、自分の立場を守るために、『白い日』の歴史を書き換えようとする者もいる。最初から疑っていたのだと誓う県知事もいれば、逃げていくものを掴み直すために、地域的な非常措置をすでに要求している者もいる。

そして、前日に足止めされ、呼び出され、脅された人々がいる。演説なしに引き出さなければならない人。カメラなしに見つけ出さなければならない人。ひとりの男が落ちたからといって、その男が残したファイルまで消えるわけではないと、あまりにもよく知っている人。

トラスクは、大きな舞台もないまま失墜する。側近たちは戦略的撤退と呼ぶ。敵対者たちは指揮権の空白と呼ぶ。歴史は後になって、好きな名前を与えるだろう。

その瞬間に重要なのは、もっと単純なことだ。彼の言語が、もはや現実を支えられなくなること。

どこでも、人は誰が勝ったのかを問う。どこでも、新しい中心を探す。

そんなものは、ない。

プロトコルは、もはや目立つ紙片のかたちでは現れない。業務ノートに、余白に、身振りに、少しでも自由を取り戻した職能習慣に、もはや互いを要約せずとも互いを認識できると知った助け合いの形に、通っていく。

ゼファーは他の都市へ伝えに出る。英雄としてではない。見せる以上のものを運べるようになった男として。

リヨンで、粗末なりハーサルしかもう受け入れない小さなオーディトリアムの埃っぽい別棟で、彼は一人の六十代の男が、同じピアノの弦を三度目にいじり直すのを見る。ノエ・ペラン。完璧にしようとはしない。

「少しだけ、うなりを残しましたね」とゼファーは言う。

ノエは目も上げない。

「そう」

「わざと？」

「もちろん。でないと、この場所まで省庁みたいな音になる」

ゼファーは微笑む。

「パリでも、実演ってやつを疑うようになってきました」

ノエは手元の動きを終えると、小さな茶色のノートを、何の儀式もなく差し出す。すでに使い古されている。

「ここでは、おまえたちのしるしは引き継がなかった」

「見ればわかる」

「別のものを引き継いだんだ。受け取る人間が働けるように、形は余白を残さなきゃいけないってことを。できるものなら、それを没収してみろ」

ゼファーはそのノートを受け取り、開く。そこには仕事の一覧と、ありえない時刻表と、身振りの変奏と、テンポの目印しかない。

「もうこれ、秘密活動ですらないですね」

ノエは肩をすくめる。

「誰にとってかによる。権力にとっては、そうだ。働いてる人間にとっては、ようやく自分たちに話しかけてくるものに見える」

ゼファーはノートを閉じる。興奮よりも深い、新しい感覚があった。プロトコルは、旅をしているのではない。翻訳されているのだ。

ミラは製本に戻る。だが、その修復のいくつかが本以外のものに向けられていることを、もう誰も知らぬふりはしない。

マレクは換気を直し続ける。始まりつつある新しい時代においても、それはおそらく、政治的行為のもっとも真剣な形の一つであり続ける。

サナは、もう事故のふりをせずに、フローより先に身体を選ぶ。

バスティアンはピアノと部屋の両方を調律し、その二重の仕事の中に、これまでついに知らなかった喜びを見つける。

ジャンヌは配達に戻る。だが、もはや誰も、ひとつの経路がただの経路だとは信じていない。

アリアとエコーは、何も統率しない。働く。

ネイサンのノートを、流通の中に置き続ける。同じ場所には決して置かず。遺物としては決して扱わず。つねに道具として。

シビルに関して言えば、彼女は完全に消えるわけではない。それでは、まだ単純すぎる。

彼女は、より稀になる。より簡素になる。より近づきにくくなる。

時おり、非接続モジュールの中に、受け継ぎの論理の中に、相互修正の方法の中に、一つの問いを、一つの声だけが答えるべきものにしないで置くやり方の中に、彼女は見つかる。

彼女は、頂点で利用可能な存在であることをやめる。流通の中の質への要求になる。

やがて、彼らの誰も予期していなかった経路から、いくつかの応答が届き始める。最初は、トラスクが完全には押さえ込めていない町々からの適応。次にもっと遠い反響。もう一つのブロックから来るものだ。そこでは紙が、もっと早く、もっと冷たく禁じられたが、それでも完全には消えなかった。そこでもまた、職能が余白や簡素なノートや手書きの注記を通して話し始める。そこでもまた、長らくガラス越しに装飾的な生き残りとしてだけ容認されていた最後の書の身振りが、別の用途へ戻り始める。無力化された伝統を飾るためではなく、遠隔修正では決して完全に単純化できないしるしを通すために。

長いあいだ、記者も、歴史家も、専門家も、日和見主義者も、勝った機械を探す。

彼らはみな、間違える。

勝ったのは機械ではない。組織ですらない。

外から生まれたひとつの知性が王座を拒み、そして人間たちが、最初は委ねたがっていたものを、ようやく自分たちの負担として引き受け直す、その正確な瞬間こそが勝ったのだ。

沈黙のプロトコルは、誰も統治しない。

翌春、アリアもエコーも決して目にする事のない都市で、トラスクのブロックよりはるか遠く、一人の女が夜明け前に保守用の戸棚を開ける。簡素なノートを取り出し、そこにある三行を読み、四行目を付け足し、まだ顔も知らない誰かが通るまで、書式の束の下へそれを滑り込ませる。

戸棚を閉じた時、何も変わったようには見えない。

プロトコルは、そうやって渡っていく。

終

この本を気に入っていただけたら、pabsan@pabsan.org までひとこと送ってください。それがいちばん嬉しい報いです。

プロジェクトを支援してくださるなら、[Ko-fi](#) からも応援できます。